

伊藤洋平

# 回想のヒマラヤ

山と溪谷社

京都大学図書



1000269440

大学院 AA研究科

0E-C

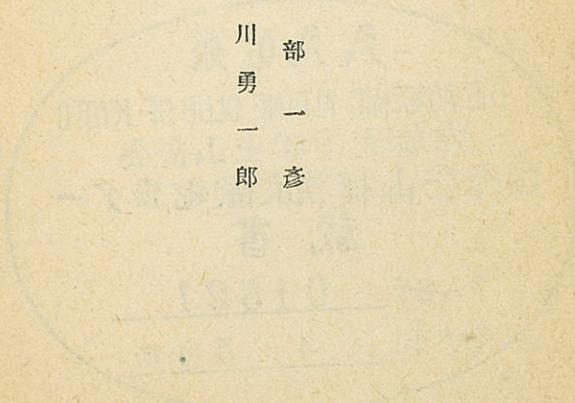
22.8

18

目次

岡部 勇一  
装幀

カ  
六  
一  
山  
川  
勇  
一  
郎  
装  
幀  
岡  
部  
一  
彦



ヒマラヤ見参……………七  
ヒマラヤを写す……………一四  
カトマンズの憂鬱……………三三  
早春の日本アルプスを飛ぶ……………三〇  
屏風の頃……………四一  
下山もまた楽し……………五五  
涸沢の秋……………五九  
「岳人」誕生……………六四  
知床（しれとこ）冬の旅……………七四

北の誘惑……………九二  
カルカッタ印象記……………九八  
アンナプルナへの旅……………一〇〇  
嵐の中の遠征隊……………一〇〇  
中世の都にて……………一〇六  
雪男談義……………一三九  
ヒラリー―会見失敗記……………一四八  
山と夢と……………一五六

この書をわが敬愛する

京大ヒマラヤ遠征隊一九五三年

の山仲間捧げる――

### ヒマラヤ見参

赤土のゆるやかにうねる丘陵であった。その背にあたるところに、道がつけられている。道とはいっても、ほんの名ばかり、踏み跡といった方が当てはまるかも知れない。

雨期はまだすっかり明け切つてはいなかった。むし暑い、いやな天候が続いていた。ときおり雲がきれると、容赦のない亜熱帯の太陽が、きらきら光る熱線をあたり一面に投げかけていた。

この強烈な日差しの下を、私たちはビケ帽にポロシャツ、カーキ色の半ズボンにテニス靴と、いったいで立ちで、全くうんざりしながら、それでも外面だけは如何にも颯爽と歩いて行った。

丘陵一帯は、沙羅双樹の疎林になっていた。この木蔭に入ると、私たちは申し合せたように足を止めた。おもむろに腰の手拭を取って、首筋の汗をぬぐった。釈尊ねはんの木と称せられる沙羅双樹は、このネパールの南部では、菩提樹などと共に、極めてありふれた日蔭木なのである。

激しい日光に、絶えず曝されている国の人々にとって、樹木というものが、如何に日常の生活と密接な関係をもつものであるか、ここまで来て私たちは漸く理解することが出来た。そして、この木蔭から、世界の三分の一に近い人間の思想を導いている仏教が生れたことも、何となく分

るような気がしたものである。

インド・ネパール国境を、東西に延びた一本の線に見立てると、その中点にあたるところに、ノータンワという町がある。カルカッタあたりで聞いても、自国の町である筈のインド人すらも、その名を知らない位の小さな町だ。そこからネパール国内へ約二十軒ばかり、まるで泥の海を行くようなひどい道を、がたがたのジープで揺られてフトワール・バザールという部落につく。バザールというのは市場の意味だから、もう少し町らしい光景を想像していたが、布地を売る小商人の店が二、三軒あるだけの、トタン屋根の目立つごみごみした屋並みである。ここが近代文明の終着駅だった。

二噸近い荷物を三十疋ほどの包みに分け、七十人の人夫の背に負わせて、私たちははいよいよ中世への旅路を辿り始めた。それから、もう三日たった。

毎日、千米から千五百米の峠を越えた。その手前にさしかかると、

「若しかしたら……。」

思わず歩調が速くなった。息をはずませ、駆けるようにして岩層の多い小径を登りつめた。が、私たちの願望は、いつも裏切られた。潤葉樹の多い二千米級の山波が果てしなく続き、その斜面には段々畠が丹念に刻み上げられている。日本内地の田舎と、さして変ることのない、見慣

れた風景である。

峠の上では、流石にむき出しの腕が、やや膚ざむい位だった。その爽快な気持もつかの間、道はたちまち高度を下げて行く。稲田が現れ、重くよどんだような蒸し暑さが、あたりを支配している谷間へ下り切ると、草葎きの農家の庭先に、バナナやパイアの実っているのが見られた。じっとりとした不快な暑さだけならば、まだしも我慢が出来た。これらの谷間は、マラリヤを始め、あらゆる悪疫の猖獗地なのであった。絶えず神経をとがらせていなければならないのが、やりきれなかった。

人夫たちの間にも、マラリヤらしい症状を訴えるものが、少しずつ増えて来た。「旦那、お薬を……。」

一日の行進が終つて泊場につくと、人夫頭が手下の病人をつれて来て懇願する。始めは、仮病ではないかと疑って見たが、この暑さの中で、唇を紫色に変え、小刻みに体を震わせて居るところは、どうやら本物に違いなかった。

医療箱の中の特効薬ブラウドリンの錠剤が、みるみる減って行った。

三日目の午後、タンシンバルバという町を過ぎた。山の中腹に千戸そこそこの家が建っている。それでも州庁の所在地であり、ネパールでは有数の都会の一つなのだ。

ここで右は私たちの目指すボカラの町へ、左はツクチャをへてチベット国境に至るクリシユナ

・ガンダキー(河)沿いの道と、コースは二つに岐れている。ボカラ道は、タンシンの町の中へ入らず、その東郊をからんで町外れの小さな峠に出るようになっていた。私たちは、荷をもった人夫がこの近道をとらせ、シエルバの頭<sup>サグ</sup>だけをつれて、町を見てゆくことにした。

南向きの急な斜面に、九折の径がつづいていく。赤土の路面は、雨期にはこれが水の通路となったものと思われる。大層登りにくい。これが主要都市の玄関口なのだから驚く外はない。二十分ほど一気に登りつめると、径は竹藪の中へ入って行った。それを抜けると忽然として、煉瓦造りの三階建の家屋が立ち並んだ街が出現した。不思議の国のアリスもかくやとばかり、私たちは思わず足を止めたのである。

もっとも、このタンシンバルバの町が、特に美しくいいというのではなかった。沿道の原始的な風物に漸く慣れて来ていた私たちの目に、その突然の出現が、小さな驚きを与え、一種鮮かな印象が残されたまでである。事実、石舗の上の牛糞には蠅がわんわんたかっていたし、三階建の商家の白壁も、近づいてみるとすっかり煤け黒ずんでいるのだった。

この町の中に足をふみ入れた私たちは、忽ち子供たちの群に包囲されてしまった。やはり、それだけ家が裕福なのであろう、服装も田舎の子供たちに比べたら、段ちがいに整っていた。トビという帽子をかぶっているか、あるいは髪を西洋風に七三に分けているものまで見られた。

「日本人だ日本人だ。」

口々にささやき交している。私たちが、坂になった石舗の道を上って行くと、これらの子供たちがぞろぞろと従って来た。その後から数十人の大人までが、物珍らしそうに続いている。

この地方に日本人が来たというのは、確かに大事件だった。生れて始めてみる日本人のすることなすことが、いちいち珍らしくてならないといった彼等の様子も、無理からぬことではある。

これはタンシンバルバに限ったことではないが、ネパールの町で大きな構えの家を見たら、それは布地を扱う商人の店だと断定して先ず誤らない。この町を通過してゆくと、流石に大きな呉服屋が軒並みならんでいるのが見受けられた。それらの家の二階の窓には、ガラス細工のこったシャンデリアの飾りつけがのぞいていたし、電気もないのに乾電池を使っているのだろう、ラジオが単調なインド風のメロディを流していた。

石舗の坂道を上りきると、ちょっととした高みに出た。そこから見下ろすと、町の中ほどに見られた州庁は、美しい白亜の建物だった。その直ぐ前に緑の芝生があり、竹で作った簡単なゴール・ポストが立っていた。役人たちが、蹴球でもやるのであろうか。ここから東へ半時間ほど行くと、近道をとらせた人夫たちが越えた郊外の小さな峠に出るわけである。

町外れに出ると、道は再び踏み跡まがいのものに戻った。そして、小さな枝尾根を一つ廻り込むと、再び丘陵の背に顔を出した。そのときである。

「あ——」  
 先頭の鋭い叫声に思わず顔をあげると、北の方の雨期開けの積雲の間から、銀色に輝いた斑点がみえた。

「確かに雪だ。」

私たちは固唾をのんだ。が、それも一瞬、灰色の雲にかき消されてしまった。

しかし、私たちは、今度は少しも失望しなかった。菩提樹の根本に腰を下ろして、それとおぼしき辺りを、じっと凝視していた。

二十分ほど経った頃であった。突如として稲妻のような光茫が私たちの眼を射った。槍の穂先をつつ立てたような鋭い峰頭が、多分あのあたりかと胸算用をしていた見当を遙かに越えた高所に姿を現した。

「わ——、ヒマラヤだ——」

興奮に上ずった声になった。十数年来、夢みて来たヒマラヤである。それが、いまこの私たちの網膜に映し出されているのだ。しかも生のままの光景で——。目頭が思わず熱くなった。

それにしても、何という物凄い高さであろう。しばらく見上げてみると、首筋がだるくなってくる。早速、地図と磁石を取り出して山名を捜しにかかる者もある。後で、それはアンナブルナ連峰の中で、最も南にせり出しているマチャブチャリという山であることが分った。

その日のキャンプ・サイトは、峠を北側に中腹まで下ったボグナスという小さな部落だった。夕方、丁度日が西に沈む頃から、次第に北方の雲が散り始めた。一枚一枚、幕を開いてゆくように、私たちの前には、大自然の壮大な絵巻が繰りひろげられて行った。

先ず一番西には、巨大な岩塊をそと置いたようなタウラギリがツクチャ・ピークを従えて聳えて居り、それからクリシュナー・ガンダキーの深い切れ込みを一つ隔てて、フランス隊の苦闘のあとを止めるアンナブルナ第一峰、マチャブチャリとそれに続く第三峰。次には私たちの主目標となっている第四峰、第二峰、ラムジュン・ヒマールの一群の峰々。さらにマルシャンデイの谷をへだててマナルス、ピーク・二九、ヒマール・チュリーのトリオに至るまで、視界一ぱいに延々と続いている氷雪の大連脈は、まさに世界の屋根にふさわしい堂々たる威容だった。

それが、夕映えにバラ色に染まっている有様は、雪山の夕景色を見慣れている筈の私たちにも、言い知れぬ深い感銘を与えた。

やがて月が出た。峰々からは夕映えが消えて、ほのかな燐光がこれに取ってかわった。寝所にあてられた農家の軒先の、ヴェランダのようになった土間に延べた寝袋の中で、私はなかなか眠つかれなかった。眼を閉じた闇黒の視野の中に、氷雪をまとった山々の姿が再現されてきた。

世界の屋根ヒマラヤ——。眠れぬままに、私はこの山々の成因や歴史、戦いを挑んだ英雄たちの話など、考えるともなく次々と思い浮べてみるのだった。

## ヒマラヤを写す

——あるカメラ狂の手柄話——

何ともいやはや忙しい旅であった。十年このかなた、夢みつづけてきたヒマラヤ遠征ではあったが、一九五三年九月中旬のある日、印度、ネパール国境にほど近い、名もなき町プトワール・バザールから、いよいよ山に向って六十余日の徒歩旅行の第一歩をふみ出したとたんに、私は、これは大変なところへやって来て、その上にとんでもない仕事を引き受けたのだと、それ恐しい気持ちになった。

私の本業は医師である。現在も母校の京都大学の研究室に残って、細菌学を専攻している。従って、遠征隊の医者として隊員や人夫たちの衛生管理から疾病の治療まで、隊の医療に関する仕事の一切を受持つのは当然としても、科学的な資料の採集、はては少しばかり語学がやれるというだけの理由で渉外事務までも分担したのは、相当な重荷であった。

それだけならまだよかった。下手の横好きの好事家の例にもれず、平素から有名無名の人の写真作品をとらえて、構図がどうの、感覚がどうのと、一っぱしの玄人ぶった口をきき、当てもいない毒舌を振っていたのがたまたま、いつとはなしに隊の写真撮影の責任者にされてしまっ

た。

永年の夢が実現したという興奮にのって、俺だって傑作を、と気負い立ったまではよかったのだが、これまで写真機屋の飾り窓でしかお目にかかったことのない国産高級カメラ（ニコン）一揃いを持たされたときは、正直なところ、ちよっとときまされた。F一・四の標準、三五ミリの広角、一三五ミリの望遠、いずれもN光学が、日本の光学技術の粋を集めて磨き上げた逸品ぞうい。それを、遠征隊に特に提供されたものだった。（この他、コニカ、マミヤシックス、パール、バノンといった各社自慢のカメラの提供もあった。）

ことここに至っては、いままさら後へはひけず、その狼狽を強いて打消すように、如何に最新のカメラが手に入ったからとて日頃使いたれた愛機？を見捨てるわけには行かない、とばかりはげちよろけの古いウエルター・ペルレ（テッサーフ三・八）を荷物の中へ押し込んだのは、われながら御愛嬌だった。

その上さらに、いかなれば騎虎の勢い、という奴で、一六ミリのシネの撮影まで買って出て、記録映画の名篇をものし、それであわよくば遠征費の一部分を、と本気で考えていたのだから、全く大した心臓ではあった。

\*\*\*

羽田からカルカッタまでは、近代文明の最尖端ともいふべきコメット機で、さらに三日間の印度の汽車旅のあげく、ようやくついた名もない終着駅ノータンワ。そこからジープにゆられること半日余り、国境から僅かにネパール領に入ったところにあるプトワール・バザールの宿舎で、明日からいよいよ始まる中世的な徒歩旅行で人夫に背負わせるために、荷物の整理と梱包をやり直したときのことだ。

出発前の準備では、届けられた品を片端から詰めて行ったので、それほど気に止めていなかったが、このとき始めて一まとめにされた写真材料が、目の前に山と積み上げられたのを見て、仰天した。天然色、白黒を合せて、フィルムが三〇〇本余り、一六ミリのフィルムが同じく五〇巻、これは私が生れてから今日までに露光した感光材料の、恐らく何倍かの量であった。思わず、深い溜息が口をついて出たのも、無理はなかった。

荷物は、すべて三〇キロから三五キロの重さに分けられ、再び梱包された。人夫一人が担う重量である。この荷分けに、まる二日間を要した。写真材料だけで、二梱包はゆうにあつた。

このようにして、いよいよ歩き出したわけだが、そのときの颯爽たる出で立ちを、内地の人々がみたら、誰しも抱腹絶倒したに違いない。ピケ帽にポロシャツ、半ズボン、九月とはいえ熱帯の灼けつく太陽の下なれば当然としても、右肩から左脇へは真新しいニコソ、左から右へは古色蒼然たるベルレ、さらに腰のバンドからは細い黒紐がズボンのポケットへと伸びている。そ

の先には、いわずと知れた露出計(ウェストン・マスター)がぶら下っているのだ。その上、右手にはベルの一六ミリのマガジン・カメラをぶら下げていたのだから、全く涙ぐましい格好ではあつた。そればかりではない。すぐ後にしがえた人夫の背中にはボレックスと三脚が乗せてあるといった有様。それに、半ズボンから、あらわに突き出した毛ずねも似つかわしく、まさに光学機械の七つ道具をつけた弁慶もかくやと思われればかり。

けれども、誰も笑わなかった。笑うどころか、現地の人夫や、物珍らしそうに集まって来た村人たちは、畏敬の念をこめた眼差しで、この遠征隊カメラマン兼ドクターの英姿を、じっと見送っていた。

\*  
\*  
\*

秋のヒマラヤは、いわゆる乾期である。十月初旬の雨期あけと同時に、二カ月も三カ月も、一滴の雨も降らない季節に入る。山頂附近では、勿論たえず雪は降っている。が、それも大した量ではない。空気は極限に近いまでに澄み切っており、光線は溢れるばかりだ。モノクロームといわず、カラーといわず、これで鮮明なネガが出来なければ不思議である。

私はカメラの一方で黒白、他方で天然色といった具合に、常に二様の撮影をした。カラーは帰国後の講演会の幻燈用、モノクロームは記録用と、二つの全く相異なる目的があつたからだ。

僅か数本にしても、カラーの経験もあつたので、露出を混同するような失敗は一度もなかったが、黒白とカラーとは、ねらう被写体の光量の分配が、全く違ふのに少なからず当惑した。そのため、モノクロームに有利な条件の多い朝夕の撮影では、黒くつぶれた影の多いカラーが出来たり、また逆にハイライトのキイの部分が、そこだけ過度になつて色褪せてしまつたりした失敗は、たまたまあつた。それでも、千古の氷雪に斜陽が映える光景など、カラーならではの写真も、幾枚かは持つことが出来た。

国産のカラーフィルムは寛容度がコダクロームあたりに比べて、やや狭いとの話に、露出の適正に神経をとがらせ、始めは露出計をいちいち取り出して調べていた。が、ものの三日間も、毎日数十枚の撮影を続けていると、われながら驚くほどの、鋭いカンが生れて来た。カメラを構えた瞬間、レンズに集る光量が頭にひらめく。念のためにウエストン・マスターを開けてみると、びたり、合っている、といった具合である。ただ、日没直前、といった特殊な場合だけ、素直に露出計の御厄介になることにした。

ヒマラヤの山の上では、五〇〇メートル以上の高度で、二十日以上も生活し、撮影を行ったことになるが、予想したほどには光線が、強くなかつたのは、ちょっと意外な気がした。何はともあれ過度にだけはすまい、と極力警戒してかかつたのだが、高所で常用した、一一に絞つて一〇〇分の一というのは、勿論フィルムはつけているが、まあ日本の冬山の撮影の場合と、大し

た相違はないわけである。もつとも、私たちのルートは、北向きの斜面にとられたので、登つて行くときは、たえず逆光をあびることになつていたことも、見逃せない条件の一つであつたかも知れない。

フィルムは、やかましい議論を嫌つたわけではないが、 $Y_1$ 、 $Y_2$ 、橙色と赤外フィルム用に $R_2$ を携行しただけ。使いやすい少数の種類に限定したことは、却つて好結果をもたらしたようだ。不覚にもカラーのためのUVフィルムを忘れ心配したが、雪面や空の色に、少し紫の色調が多くなつた程度で、案ずるほどのこともなかつた。

\*  
\*  
\*

ステイル撮影は、まだしもだつた。一枚々々の断片的な画面だから、構成に変化を求めることは、比較的やさしい仕事だつた。ところが、一六ミリのシネとなると、これはまた、のっぴきならない場合が多かつたのである。

カメラマンは隊と一緒に前進していくのだから、下手をすると歩いてるところばかり、それも後姿ばかりの、行進だけが出て来ることに、なりかねない。そこで、息せき切つて、人夫や隊員たちを次々と追い抜いてゆき、先頭から数百米も前に出て、さらに角度をかえねばと、道から十数米もの斜面によじ上つて、三脚を構えねばならないことになる。一カットとつて、カメラを

取め、急いで道のところまで下ると、いつの間にか最後尾になっていて、あわてて隊の後を追う、といった調子で、なかなか大した労働ではあった。

キャバランの間は、まだそれほど感じなかった。が、五〇〇〇メートル以上になると、このカメラマンの超過勤務は、質量ともに増大した。小さな隊なので、特にカメラマンの荷を減らすわけには行かない。ともどもに稀薄な空気の中を、あえぎながら登って行くのだから、クランクを廻すのは、どうしても休憩の時だけ。それも、他の者が、荷を下ろして、大きく深呼吸をしながら、少しでも多くの酸素を吸い込もうとしているとき、哀れなカメラマンは、呼吸からくるカメラのぶれを気づかなくて、息を殺してファインダーをのぞかねばならぬのだ。

南面が駄目と分って、急拠ナムン・バンジャンの五〇〇〇メートルの峠をこえて大ヒマラヤ山脈の北側に出ると、そこはチベットの乾燥地形。そろそろ吹き始めた冬の前兆の扁西風にあふられて、黄塵万丈とまではいかなくとも、ひどい砂ぼこりを浴びる毎日がつづいた。この砂塵が、いつの間にかボレックスの歯車の中にしび込み、北面のベース・キャンプに到着した頃には、全く動かなくなってしまったのは痛かった。そのために、肝心の登りにかかったとき、私のルックの中には、僅かにコダクロームのマガジンが四つ、ただの二〇〇フィートしか使えるフィルムが残されていないという不幸な結果になった。全く一世一代の痛恨事だった。

\*\*\*

他愛のない手柄話を、くどくどと並べたてたわけだが、それなりに一層他愛のない落ちをつけ、結末をつけたいと思う。

黒白のネガは数枚持ち帰ったが、その中で七十枚ほどを選んで、全紙に引き伸した。京都、神戸の大丸のギャラリーを一週間かりうけ、後援の新聞社の主催で写真展を開いた。京都では一万数千人の観覧者を集め、K社の写真部長の言葉では、「プロ顔負け」の出来ばえ、だとの好評をとった。

またカラーは、京都在住の二科会の絵かきさん達の目の前で映写して、その色彩が鮮やかなことに、讃辞を送られた外、百枚ほどを持って、三十回近くの公開講演を打って廻ることが出来たのであった。

さらに、十六ミリは、二〇〇〇フィートのコダクローム・フィルムが現像されて戻って来たが、編集を専門家に依頼して、二巻に切りつめ、音を入れて、「総天然色トッキー・アンナブルナ一九五三年」が出来上がった。口の悪い私の先輩や仲間が、「ラッシュでは、全くどうなることかと思つたが、編集したら見違えるように良くなった。」と憎まれ口をたたいている。が、当のカメラマンは、ひそかに思っている。如何に卓越せる編集技術をもってしても、画面を変えたり作っ

たりすることは出来ない筈。となれば、撮って来た元のフィルムが良かったことになるではないか、と。

事実、ノータンワの終着駅で、草が生いしげった線路が切れていて、その向うに赤土の壁が崩れかけた農家のあるカット。プトワールでの雨の日の詩情ゆたかな描写。あるいは、第一キャンブへの登高、次第に濃くなって行く夕闇の中に、バラ色に浮び上ったマナルスの望遠による一カット。そして、最後に近いジェット気流のためにわき返っているアンナブルナなど、玄人にみせても、といまだに大した鼻息である。

黒白が五枚、アサヒカメラに掲載され、また偶然のきっかけから、カラーが、全日本写真サロンに入選したりしたことは、一層このカメラマンの鼻を高くさせ、今では一三五ミリの望遠を手にもって、おどおどしていたことなどすっかり忘れ、ニコンなど十年も前から使っている、といわんばかりの口ぶりで、若い岳人たちを煙にまいてるのである。

## カトマンズの憂鬱

1

カトマンズは、いうまでもなくネパール王国の首府である。奈良盆地ぐらゐの広さの山間の盆地に、人口十万と称せられる都市がある。日本の地方都市に匹敵する規模の街だが、これに次ぐネパール第二の町ポカラが、周辺を合せて一万二千しかないから、この国では、ずば抜けた大都会ということになる。かつて、ある英国人が、このカトマンズ及び周囲の盆地を指して、「これだけが、ネパールだ。」と、いみじくも喝破したという。その言葉のとおり、カトマンズはネパールの心臓そのものだ。

世界の高山の七割近くまでを、領土内にもっている国の首都にふさわしく、カトマンズの街からは、北方に大ヒマラヤ山脈が、白銀の屏風を展いたように眺められる。その山なみは、さらはずっと東の方まで、果てることを知らぬげに連らなっている。折角ながら、エヴェレストは、ここからは見ることが出来ない。

カトマンズの印象を、一口でいえば、「中世の都」といった感じである。もっとも表通りの建物など、殊に中心街であるジェッタ・ロードの商店街などには、「近代」が多分に混りかけているの

が見受けられるが、市内いたるところにみられる寺院の塔や、民家の窓の精巧を極めた木刻などには、中世そのままの空気が漂っているように思われるのだ。

遠征隊の、煩雑な渉外事務のあい間に、私は医者としての自分にたち返り、専門の分野での体験を、少しでも豊富にしたいものと、僅かな暇を盗むようにして、街へ出て行った。カトマンズで唯一つ、ということにはネパール中でただ一つの、陸軍病院へも出かけて行ったりした。だが、一週間という日数は、あまりにも短か過ぎるように思われた。

私たちの世話をしてくれた皇太子秘書のダルシャン君の話によると、カトマンズには、医者が三十人ほどいるという。そして、これがネパール中の全ドクターの数だ、といっても、大した間違ではない、とのこと。もっとも、医師法などというものは、ないらしく、従って、医者の資格にも制限がない様子で、その腕前のほどは兎も角、医者と称して、自他ともに、それで通用さえすれば、学歴も経験も、大した問題ではないわけだ。インド人のドクターが大部分だとのことだった。

ある日、カトマンズの南郊にあるバタンの町へ、名所見物に出かけた。バタンは、アソカ王の遺蹟もあり、昔の王宮のあとや、歴史的に有名な寺院が多く、市の東の方約十軒のバトガウンとともに、いわばネパールの古都ともいふべきところ。遠征隊が同国内を行動中、ずっと私たちの通訳兼絡連将校として活躍したディリー君が、自分の居住するカトマンズだというわけで、案内

をしながら腕によりをかけて詳細な説明をしてくれるのだが、残念ながら、歴史的な背景に対する基礎知識に缺くところがある私たちには、もう一つ趣興をかきたてられる、というところまでついて行けなかった。

最後の塔の見物を終え、カトマンズの中心街にあるホテルへ戻ろうと、とある裏通りの、崩れかかった赤土の土塀に沿った小径を歩いていくと、私は路傍の奇妙な光景を目撃して足を止めた。

そこは、民家の入口になっていて、むしろのような粗末な敷物の上に、五、六才位の一人の少年が、まる裸の姿で体をよこたえていた。油のようなものを、塗っているのだろうか、乾期の明るい陽光をあびて、黒褐色の膚が、にぶい輝きを帯びて眺められた。さらに些細に観察すると、黒くみえたのは、顔から足の先まで、体一面に生じている痲皮のためであることが分った。

いうまでもなく、天然痘に罹患した小児であった。油をぬるのは、皮膚を強くするために昔から行われている、ネパールの民間療法だと、ディリー君が説明した。

実際、この光景は、私に大きな衝撃を与えた。ただ一介の旅行者が街を歩いていて、文明国から、というよりは、世界中から姿を消し去ったものと信ぜられていた疾病の、しかも典型的な症状を見ることが出来たという事実は、私の医学徒としての魂に、いい知れぬ激しい動揺を与えた。それは、近代化への峻しい道を、懸命に辿りつつあるネパール王国の問題としてではなく、

近代医学が、文明の恩恵に浸っている自己の周囲だけをみて、軽率な結論を信じていたことに對する、手痛い批難のように受取られたからだ。

もっとも、後で聞いた話によると、政府も種痘の重要なことは、一応は認めているのだが、国民の大部分が宗教的な信念から、体を傷つけて、痘苗のような異物を植えることは、神を冒瀆する行為であり、それを強いて行えば、どのような恐ろしい神罰があるか分らない、と固く信じているために、手の施しようがないとのことだった。

また、最近のネパール国内での天然痘の著しい流行は、折角設けられていた隔離收容所が、財政難か何かの原因で突如として閉鎖され、收容されていた患者が、われ先にと家へ帰ってしまつたために、一度に大流行をみるに至つたものだ、との話も聞いた。

いずれにしても、心の痛む挿話であった。このバタンの街角でみた天然痘の子供の幻影は、今日でもなお、ありありと私の臉に浮んでくるのである。

## 2

日本を出発するときから、かねがね想像していたことではあつたが、ネパールの結核患者の数は、おびただしいものになるようだ。その原因が、生活水準の低さ、それにもなった食生活の貧困にあることは、先ず間違いない事実であろう。一時、わが国でもよく言われたように、この病気の性格が、「貧乏病」と呼ばれるにふさわしい、一つの側面をもっていることから見ても、

あるいは、当然のことであつたかも知れない。

ところが、カトマンズで、私が少なからず驚かされたことは、裕福で何不自由ない日々を送っている者の、最も上層階級に属する貴族たちの家庭にも、必ずといってよいほど、結核患者がいることだった。

短い滞在の期間中に、私は何度も、これら上流家庭への往診を依頼された。その用意がないから、と辞退しても、その意志が通じない為もあつたらう、どうしても聞き入れられず、出かけてみた。

案内されて行くと、日の当らない薄暗い部屋（ネパールの家は、非常に窓が小さく、まるで日本の土蔵そっくりの建て方だ）の片隅で、明らかに開放性結核である、痩せ衰えた若い婦人が、生後間もない赤児を抱いていたりした。さらに、驚くべきことには、その枕許をみると、金に糸目をつけずに買い集めた、アメリカ製のカルシウム・バスやハイドラジッドなど、最新の結核新薬の空罐が、ずらりと並べられているのだった。

これを見て、私は、この国の結核は、必ずしも貧乏病として片づけられないものがあるように思った。この哀れな母親の場合にも現れている通り、無知からくる衛生思想の缺如が、一応皮層的な原因として挙げられる。しかし、真の原因は、もっと深いところに根ざしていることは疑う余地がない。

私は、あわてて家人に、小児を若い母親から引き離すように命じ、通訳をしてくれていたデイリー君を通じて、乳幼児への結核の感染が、いかに無造作におこるかということ、さらに、その結果が必ずといってよい程、全身結核から死亡へのコースを辿るものであること、などをくどくどと説いて聞かせた。が、その婦人の深く落ち込んだ眼には、子を取り上げられた失望の色が、ありありと浮んでいただけで、私の期待したような反応は、少しも見られなかった。

このように、結核の多いネバールの皇太子殿下宛に、日本の製薬会社からバスやハイドラジッドが多量に、私たち遠征隊を通じて送られたことは、この国の官民に、大きな感銘を与えたようにみえた。政府の厚生次官にある人が、私をホテルに訪ねて、鄭重に謝意を表した後、寄贈をうけたこれらの薬品は、殿下の意向によって、貧しい家庭の患者たちに施用することになった旨を告げた。

しかし、この出来事は私の心を柔げるのに、大して役には立たなかった。首府のカトマンズに僅か三十人の医者がいるだけ、その中で結核の専門家（といっても、どの程度の医師か、つまびらかでなかった）がたった一人、それも今は米国に留学中で居ないとのこと。それでも、とにかく医者となりのつく者がいるだけでもカトマンズは良いのである。地方へ行けば、殆んど皆無の状態なのだ。そして、薄暗い土間の片隅で、何万人という瘦せ細った結核患者が、近代の知恵の恩恵に一度も浴することなく、死への路を辿っている光景が、私には、ありありと目に見えるように思

われた。

私は心の中のどこかで、激しい音響をたてて崩れ落ちるものを感じていた。近代医学の担い手の一人としての、私の自負と信念も、その衝撃波をうけて、風前の灯のように揺れ動いていた。

その一時の動揺がおさまると、医者としての私の魂は、果てしない憂愁の底へと沈んで行くのであった。

## 早春の日本アルプスを飛ぶ

\*\*

瓢箪から駒が出た、といつては、この計画プランの実現に努力して下さったC新聞社のKさんに対して、甚だ申し訳ないことになる。が、とにかく私にとっては、晴天の霹靂以上の思いがけぬ話であつたことには間違ひはない。

しかしながら、もとをただせば、二週間ほど前に、私がKさんへの手紙の中に、ちょっと其の場の思いつきとして書き加えたことに端を発しているのだから、感謝こそすれ、文句をつける筋合ではさらにない。ただ、余りにも突然の申出だったので、いささか面喰つたまでのことである。

その話というのは、こうだ。私の大学の若い現役連が二十人近く、春山合宿として、長らく懸案となつていた毛勝三山をこえて劔までの積雪期の初縦走を、極地法形式で行うためにこの三月上旬から行動を起していた。隊長はアンナブルナの戦友のY君。幸いコースは終始、主稜線上を通ることもあり、また行動期間も一カ月といった長いものだから、若し、新聞社の航空機が取材その他の所用で富山へでも飛ぶことがあつたら、少し舵をまげて劔北方の稜線上をさぐってみ

てはどうであろう。案外簡単に登山隊が見つかるのではないだろうか。こんな意味のことを、Kさんへの手紙の中に書き加えたのである。ところが、それから一週間ほどしたある日の午後、珍らしくC社から長距離電話がかかって来て、例の登山隊の行動をさぐる傍ら、空から春山の写真をとるために、明日、一台飛行機を仕立てるから、是非とも乗ってもらいたい、との伝言である。あまり急な話なので、ちょっと戸惑つたが、私は一瞬のうちに受ける決心をした。数時間で仕事の始末をつけて、最後の上り急行に飛びのつた。不連続線の通過による冷雨が、はげしく列車の窓を打っていた。

\*\*

この世にも不思議な山行の出発点となつたのは、名古屋の南郊、約二十軒の、知多半島の基部に近いところにある大府の飛行場。といつても、新聞社が専用している、一寸した広場に過ぎない。

ここで一行六人が始めて顔を合せた。正線縦士のY氏、副線縦士のS氏、いずれもテスト・パイロットあがりの達人で、C社の誇る第一線の航空部員。それに、通信部長のBさんと助手のK君。そして、いつの間にか臨時記者ということになつてしまった私の女房役のカメラマンのH氏。いずれも私とは全くの初対面であることは言うまでもない。

機は六人乗のビーバー機。愛称を「若鷹号」という。まだ前夜の雨の名残り、あちこちに水溜りの出来ている短い滑走路を無造作に走って離陸したのは、三月十九日の午前十一時五分。すぐにさしかかった名古屋の上空では、東へ去った不連続線の置土産の層雲が、一面にたれこめていたが、多治見あたりから次第にガスが薄れて、日がさし始めた。不連続線のとを追うようにして、じりじりと進出して来ていた移動性高気圧の前端が、もう中部山岳の上にさしかかって来たのだ。とすると、今日の午後は、全く月に一度あるかないかの、穏かな日本晴になる筈だ。

「ワカタカ、ワカタカ……」私の頭上のマイクロホンからは、C社からの連絡の無線電話の音が流れてくる。

「はいはい、こちらはワカタカ、ワカタカ……ただいま多治見上空通過、天気は漸次よくなる見込み……どうぞ。」

後の座席ではBさんが、真剣な声で応答している。

十一時二十分、行く手の左右に、純白の雪山がみえ始めた。左は御嶽、右は木曾駒連峰の一部だ。このあたりから、天気はすっかり晴れ上った。上空は、飛行機の翼もそまりそうな青い空だ。機は木曾谷の上空を、やや御嶽より進む。高度二八〇〇米。右手には、本駒から南駒にいたる中央アルプスの全貌が眺められる。それも山だけでなく、万物が、ようやく春の営みを始めた木曾谷の底から、まだ冬が居残っている氷雪の頂稜まで、楽々と一つの視野に収まるのだから

素晴らしい。

\*\*\*

十二時ちようど、木曾谷をぬけ、乗鞍岳のなだらかな山容を左に見送って、松本市の上空にさしかかると、いよいよ待望の穂高だ。もう黒い山膚が、まだらな雪の間からのぞいている大滝山から蝶への前山の向うに、一きわ高く、雪を止めぬ岩壁をめぐらせて巖然と立ちはだかった姿は、さすがに日本の山岳の王者としての貫録充分だ。

かつての日、訪れた思い出の多い岩場が、一つ一つ識別されるのも懐しい。奥又白の壁もみえる。あの岩壁の下の谷のどこかでは、この冬、登山綱が切れるという不慮の事故のために、神に召された若い岳人の霊が眠っているのだ。しばし黙悼して、冥福をいのる。

ついで大切戸の切れ込みから南岳、中岳をへて槍がみえる。この上空から遠望すると、日本のマッターホルンの穂先も、わずかにそれも分る程度の、小さな岩の突起に過ぎない。

ふと右手をみると、正午の陽光をにぶく銀色にてりかえしているのは諏訪湖だ。そのはるか向うに、富士山が、いつもながらの美しい姿をみせている。考えないでいようと思っても、やはり数カ月前の惨事が回想される。今日あたりも、若い岳人たちが、僚友の姿をもとめて、あの雪面のあたりを、パトロールしているに違いない。

富士の右手前方の南へ続く山なみは南アルプスだ。いかつい頭をしたのは北岳だろうか。やや遠すぎて、一つ一つの山は、一寸識別し難いようだ。再び機の左の窓に視線を戻すと、舞台は早くも一転して、爺、鹿島槍の真正面だ。さらに唐松から不帰をへて白馬三山へと、後立山の山なみが展開している。そして、その先のはてしないうす藍色のひろがり、日本海に違いない。

天候は、どうやら、中部山岳全体が、すっぱりと移動性高気圧の圏内に入ったもよう、いよいよ絶好である。

私はふと、一昨年の秋、アンナブルナ遠征の帰途、ボカラからネパール王国の首都カトマンズまで、大ヒマラヤ山脈に沿って四十分ほど飛んだ、その日もこのような素晴らしい天候だったことを思い出した。

\* \*

よく晴れた日、といっても、モンスーンをやり過ぎた秋のヒマラヤは、数カ月もの間、一滴の雨も降らないような天候がつづく。いわゆる乾燥期である。

チベット国境に近いアンナブルナ北面のベース・キャンプを引き揚げてから、マルシャンデイの溪谷に沿って、十日の旅をつづけ、出発点のボカラの町に戻って来た私たち一行は、ボカラ県

の知事のポーラン・シン氏の官邸の庭にテントを張って、約一週間余り、休養と帰国の準備をかねた滞在の日々をもった。

ボカラは、周辺を合せて人口は一万二千余り、それでもネパール第二の都会であり、この国の西部の要衝ということになっている。石だたみの通りの両側ならんだ商家は、流石に堂々たる構えのものが多く、住民の服装も、かなり整っていた。渉外の事務を担当していた私は、よく知事と街を歩いたが、軒並みの家々からは、主人らしい年輩の男が小走りに出て来て、彼に向かって合掌するネパールの礼を行った。それに対して、知事は「ジェ・ネパール（ネパール万歳）」と、いちいち丁寧な答礼していたものだ。

このボカラに、最近、飛行機が来るようになった。カトマンズ、ボカラ、バイロワ、ブリトナガルの四つの重要な町を結ぶ航空路の一部で、ネパール政府が、インド航空の飛行機をチャーターして、就航させているのが、それである。もっとも、飛行場といえる形を整えているのは首都のカトマンズだけで、あとは牧場の草原を利用したものだ。

ボカラの東郊にある飛行場も、平素は二百頭あまりの牛が草をたべているのだが、飛行機が来る日には、これらの牛が滑走路から追い出されるのである。十一月の下旬のある日、いよいよ明日は、私達を、このヒマラヤの下の町から運び出してくれる飛行機が来るというので、夕方から、テントを飛行場の一隅へ移した。ここからは、アンナブルナの全貌は勿論のこと、西方にダ

ウラギリ、東にマナルス、ピーク29、ヒマール・チュリー、の巨峰が眺められる。もともと、これらのヒマラヤの山々の眺めに飽食した私達には、「ああ見えているな。」といった程度にしか、その頃は感じなくなっていたのだが……。

翌日、朝から荷をまとめて出発の用意を整えたが、待てど暮らせど、飛行機はやって来なかった。

午後二時過ぎ、やっと爆音が聞えて来て、双発のダグラス機が、アンナブルナ二峰の方向から進入して来て、二、三度ひどいバウンドをしながらも、兎に角、着陸した。先ず、インド国境近くのパイロワまで飛ぶ本隊とシエルパたちが出発し、引返して来た機で、カトマンズへお礼廻りなど、外交的な使命をもった私たち三人が、飛び立った。

南に向って離陸した機は、私たちが往路、歩いて迎って来た、マテイガウンの稜線を左旋廻でかわして、左手にアンナブルナをみながら高度をとった。やがて水平飛行に入ると、もうマデイ・コーラの上空だった。私たちを阻んだ、南面の大障壁が、手にとるように見える。ラムジュン・ヒマールに続く雪稜の、あの切れ込みは、ナムン・バンジャンだ。苦しかった転進の峠越えの一週間。それらの思い出からも、遠のきつつあるのだった。

早くも、マナルス三山が姿をあらわして来た。殊に、ヒマール・チュリーの南面の断崖のすさまじさ、巨大な氷瀑、大変な山だ。その向うに、ガネッシュ・ヒマールが続いている。次いでラ

ンタン・ヒマール、あるいはゴサインタンに続く、ネパール、チベット国境の山々。カトマンズまでの四十分間は、まるでネパール・ヒマラヤのオンパレードだった。それだけではない。カトマンズ盆地の上空で、着陸のための旋廻に入ったとき、さらに東方に果しなく、白銀の山なみが、視界の向うにあるエウレスト、またはカンチェンジュンガまでも、延々と続いているのを見て、私はただわけもなく、深い溜息をもらしたものだ……。

\*\*\*

穂高がみえ出してから、白馬を後に見送るまで、日本の北アルプスの飛行は十分余り。その高さも、またスケールも、もとより世界の屋根ヒマラヤに比すべくもないが、いまこの機上から眺める祖国の雪山の姿も、追憶の中の山々に劣らず美しい。

操縦席のY氏が、下降の合図らしい手まねをした。みると長野市の、しかも善光寺さんの真上だ。機は左にゆるく旋回しながら高度を下げ、十二時十五分、犀川に近い長野の市営飛行場に着陸した。

飛行場といっても、六百米ほどのコンクリートの滑走路と、木造の格納庫が一つあるだけの簡素なものだが、地方都市のものとしては、これでも立派な方だとのこと。あまり、飛行機が来ることもないとみえて、しばらくすると、子供や、モンベの上から長靴をはいた農家の婦人たちが、

はては腰の曲った老人までが、十数人、この若鷹号の周りに集って来て、物珍らしそうに触って  
みたり、ぶつぶつ独言をいながら内部をのぞき込んだりしていた。

私はパイロットのY氏と、後立山をこえて剣に飛ぶコースの打合せを終ると、滑走路の脇へ行  
って用を足した。そして、ふと西南の方をみると、うららかな春霞の向うに、白い雪山がみえ  
た。白馬から鹿島槍に至る山稜である。

善男善女の思想からもほど遠く、牛に引かれる機会もなかった私は、この信州一の都会、長野  
市は、いつも汽車で素通りするばかり。それにしても、この善光寺平から、北アルプスの一角が  
望見出来るということは、小さな驚きであった。

雪山を飽かず眺めている私の背後に足音がして、飛行場の管理所の人が近づいて来た。横に並  
ぶと、犀川の向うの岸の方を指して、

「あのあたりが、川中島の古戦場ですよ。」  
と、親切に説明してくれた。

\*\*\*

午後一時四分、通信のBさんと助手のK君を飛行場に残して、再び春の微風の中に舞い上った  
若鷹号は、予定通り機首を鹿島槍の双峰に向けた。飛ぶこと十五分にして、右手には長い八方尾

根の雪の斜面の向うに、白馬三山が、手にとるように見える。大雪溪もみえる……。ふと、目を  
転じて下を見ると、平家の落人がかくれていたという伝説のカクネの真上だ。機は北槍につづく  
天狗尾根を伝って、いま後立山の主稜をこえようとしている。名だる北壁は、あまりに急峻すぎ  
て、上からはその岩壁をみる事が出来ない。

高度三五〇〇米。いま南槍と北槍とを結ぶ吊り尾根の上をこえた、と思つたら、二分後には黒  
部の深谷の上をすぎ、そして、さらに二分たつかたない間に、劔岳三〇〇三米の雪のドーム  
が、ぐんぐんと映画の大写しのように目の前に迫って来た。機は大きく右に回って、頂上の雪の  
膚を撫るようにして飛ぶ。八峰、三の窓、池の谷、早月尾根、東大谷……と、めまぐるしく情景  
が変って行く。が、頂上附近の処女雪には、全く人跡がみられない。

私はパイロットのY氏に、主稜を辿って北へ向けて飛ぶように合図する。大窓の少し北寄りの主  
稜上で、越中側寄りの、雪と岩との境目のあたりに、心なしか一条の筋のようなものがみえる。  
双眼鏡を目から離さないで見張っているS氏に指さすと果してシュプールだ。と、次の瞬間、目  
前に迫って来た猫又山(二三七八米)の頂上附近に、「あっ、いるいる。」黒い人影が、一つ三つ……  
五つ、ゆっくり山稜つたいに登って行く。

時に一時三十五分である。名古屋を飛び立ってから、僅かに二時間半で、目的の登山隊を発見  
したことになる。飛行機に気づいた五人が、立ち止って盛にビッケルを振っている。それも一

瞬、機尾の方に飛び去ると、同じ稜線上に、緑色の点が目に飛び込んで来た。カマボコ型のテントだ。多分、第二キャンプであろう。三年前、冬の北海道知床遠征に使った思い出のものだ。隊員が二人、中から飛び出して来て、手を振っている。これを逃してなるものかとばかり、写真部員はスピグラのシャッター音を、雨あられと響かせている。

それからあとは、至って簡単に事が運んだ。毛勝三山から大窓までの間、三つのテントと、都合十七人の隊員を確認するまで、二十分とは要しなかった。この確実的な布陣ぶりからみて、登山隊の計画が順調に進展していることは明かであった。頂上まで、あと二日もあれば到達出来よう。最後に、大窓に向けて大胆に機首を下げたとき、猛烈な下降気流に巻き込まれて、あわやという場面もあったが、Y氏の見事な操縦で切り抜け、お別れに劔の頂上を二回旋回して東に向った。

二十分後、私たちは陽炎ゆれる長野平野の、春のまったただ中におり立った。

## 屏風の頃

なぜだか、そのわけはわからない。近頃、私はふとした拍子に、たとえば、街の横断歩道で、信号が変わるのを待ちながら立ち止まるときとか、停車していた電車が、がたんと音をたてて動き出した瞬間などに、あたかも霜ふり肉の断面のように、黒々とした岩面にこまかく無数の筋を刻み込まれた岩壁の幻影を思い浮べることがある。

それが、かつてあれほど、身も心も打ち込んでいた屏風の正面の壁なのか、あるいは奥又白のどこかの壁の一つなのか、さらにまた一時はことのほか烈しく思いこがれたまま、今日までついに訪れることのなかったカクネの壁なのか、その点になると一向に判然としない。ただ、それが絶悪無双を誇る、どこかの岩壁の、真冬の姿であることだけは確かである。

それよりも、一層はつきりと自覚されることは、そのような壁の幻影が如何に鮮明に描き出されはしても、所詮はちぎれちぎれのフィルムにすぎず、それをあくまで追い求めてやまないだけの、あのうつつぼつたる気持が湧いて来ないことだ。

これをもって、情熱が枯れてしまった、とは考えられない。かたわらで、じっとそれを見守っている、もの静かな一つの眼があるのを、感ずるのである。勿論、それは十年前の私には、思い

も及ばぬ、全く無縁のものであった。

一途に一つの夢に熱中することが出来た時代、それは多分もう二度とは私を訪れることがないかも知れない。ときおり私の脳裏に映っては消える冬の岩壁の幻も、遠ざかって行く日々を惜しむ、私の心の鎮魂歌の、一つの変形でもあるのだろうか。

冬の日本アルプスからヒマラヤへと、足跡を大きく伸すことの出来た倅は、より広い山の世界をみる目を、私に与えてくれたことは事実だ。が、あの頃には、それほど強く感ぜられなかったもろもろの人の世のきづなが、目にみえぬ無数の糸で、私をがんじがらめに、いましめてしまったことも見逃せない。

そのためであろうか、いま屏風の頃の山日記をひもといてみても、一つの岩壁にすべてをかける、といった当時の視野の狭さが、却って、いとおしまれるのである。

\*  
\*  
\*

三月十八日(曇) 島々から、材木を運びに大野川へ入るというトラックに便乗して奈川渡へ。そこから、Oと二人、雪どけの歩きにくい道を、とぼとぼと登っていく。背中のリュックはともかく、十字にしたスキーが肩に痛い。沢渡、坂巻とすぎて、中ノ湯へついたのは夕方六時二十分。下界の垢を落し、早くから床についた。

三月十九日(晴) 中ノ湯発、八時二十分。珍らしく、早く出発したものだ。釜トンネルを抜けると、例の嫌なデブリの出た斜面の横断がつづくが、ダムの上から梓川の河原へ出てからは、スキーが快調だ。よく晴れているが、嫌な巻雲が出ている。この分では天気は続かないだろう。焼岳を見送り、大正池の取入口のところから、再び夏のバス道路に上る。

今日は徳沢までだから、とつい気楽になり、帝国ホテルの木村さんのところへ寄り、さらに常さんの小屋へも寄ったりして、あちこち油を売って行った。

「今度は、どこへ行くだね。」と常さん。

「うん、まあ横尾あたりで遊ぶんぜ。」と私。とても、本当の目標を、話す気にならない。「ふむ……」。常さんも、それ以上は聞こうとはしない。

天気は、どうやら下り坂。若し明日、幸いにも晴れたら一気に決行することにして、さし当って不必要な装備と、食糧の半分を常さんに預けて徳沢へ。

徳沢園に五時半着。小屋には誰もいない。夕方から、気温上昇。駄目と知りつつOと二人、ランプのほの暗い炎の下で、登攀の準備に時を過した。

三月二十日(雪) 午前二時、起きて外へ飛び出す。案の定、しんしんと粉雪がふっている。小屋の周囲の落葉松の梢に鳴る風の音もなく、実に静かだ。Oも出て来て、無言で北尾根の方の夜空を見上げている。勿論、何も見えはしないのだ。

小屋の中に引き返し、しばらくランプの下に、二人でどっかとあぐらをかいて座っていた。遂に予想通り、天候は崩れ始めたのである。仕方がない、持久戦だ。

一日中、二人ともごろごろ寝ころんでばかり、いわゆる不貞寝である。

三月二十一日(氷雨) 絶対に、たとえ奇跡が起きたとしても、晴れる筈はない、と信じていた。それでも、やはり念のため二時に起きる。降っている。小粒だが、重そうな雪だ。気温はプラス一度、道理で暖いはずだ。

退屈で仕方がない。登攀の用意は、もう二日前から整っていて、いくら再点検してみても、完全に揃っていて、手の加えようもない。どうにもならなくなつて、ズボンの一寸した穴などをかがってみたりする。折角Oがどこかの隅で見つけて来た古雑誌も、この一月に入ったとき、すっかり読んでしまったものだった。それでも、もう一度、一頁ずつ繰ってみる。

終日、氷雨をまじえた雪が降りつづく。下からは、誰も上ってくる様子がない。

三月二十二日(氷雨) やはり二時に起きる。未練がましく、一時間余り、寝床へは戻らずに様子眺めている。これで三日、降りつづいているわけだ。

「いいかげん、雪も品切れになつてもよい頃だ」  
「全く——」

心なしか、雪は一層はげしくなるようだ。諦めて、再び寝床へ戻る。

午後、気温上昇、雨が入ったのだらうか、奥又白谷の方で、三分間くらいに、遠雷のような雪崩の音が響く。こうなれば、天の底がぬけるまで降れと、やけくそである。二人とも話題も尽きてしまい、一時間も、あるいはそれ以上も、口をきかない有様だ。幸い、雪崩の号砲が、この死ぬほど退屈な空気を、ときおりゆすぶってくれるのは有難い。だが、これでは、明日たとえ晴れても、危くて登れたものではない。

寝ころんで、黙って、小屋のすすけた天井を見つめていると、やはり下界のことを思い出す。私たちが、この三日間、何もせずこの山中に降りこめられている間にも、めまぐるしい変動を上げているであろう人間社会。そして、それと何一つ関連をもたない目的のため、くる日もくる日も、待ちつづけている私たち。さらに、私たちの行為とは、また何のかかわりもなく、何頓という雪を落しつづけている山。

あまり何も体を動かさないうち三日も引籠っていたせいか、夜はなかなか寝つかれなかった。雪崩の音は夜半までつづいていた。

三月二十三日(小雪後曇) まるで機械のように、今日も二時起きしたが、やはり駄目。二人とも無感動な表情で顔を見合わせるばかり。

午後、食糧が缺乏しかけて来たため、体の運動をかねて、残して来た荷を取りに上高地まで行く。途中で、北穂小屋のK氏の一行に会う。横尾の岩小屋に入る由。天候が、少しずつ好転して

きた様子。下山の日も迫っていることだし、若しこの調子で晴れたら、明日にでも決行しよう  
と、二人は雪原のようになった梓川の河原の上をスキーを走らせながら、語り合った。

上高地では、常さんまでが、この連日の悪い天気で「クサッた——。」といていた。夕方、再び徳沢に戻った頃から、急に気温が下り始めた。夜になって、雲が切れ始め、長堀山の上から満月が出た。いよいよ晴れそう。再び装備、携行品を点検してリュックにつめ、それを枕もとに並べて就寝。

\*\*\*

三月二十四日(晴後風雪) 今日こそは、と例の如く二時に起きて、小屋の外に出てみると、空の三分の二位まで星ぼんでいる。前穂から北尾根にかけては、未だに黒い雲が、まつわりついているが、気温はやや低く、零下三度である。決行することにして、取っておきのハムと卵を使って、豪華な朝食を作る。このハムは、Oのお父さんが、出発のときプレゼントして下さったもの。携行品を再点検し、火の始末が完全であることを確かめた後、小屋の入口からスキーをはいた。三時二十分である。

徳沢から、すぐ梓川の河原に出てみると、昨日、K氏の一行が岩小屋へ入った際のものと思われるシュプールが、懐中電燈の光の中に、かすかに浮び上ってみえた。川原一面に雪のハイウ

エイみたいになっているが、やはり人の通りそうな箇所は、自然と一致するものとみえ、ひとりでこのシュプールを辿って行くことになる。努めて汗をかかないよう、ペースを押えていく。河原でも風のふきぬける部分は、積雪が吹き飛ばされて、ところどころ岩が露出しており、大層すべりにくい。屏風の頭に、依然として雲がかかっているのが気掛りだ。出合の手前で裏屏風の下を斜に切って、横尾谷に入る。

この頃から、次第にあたりが白らんで来た。目指す正面岩壁も、ぼんやりと幻のように浮んで見える。雪の附着状態は、ほぼ予想通りだ。岩小屋で夜が明け始めた。K氏のパーティは、北穂へでも行ったのだろうか、荷物だけ残して、岩小屋には誰もいなかった。

しばし休憩の後、再び川原へ下りて、谷通しに登って行く。しばらくすると、屏風の正面岩壁が、左手にその全貌を展開し始める。谷筋は間もなく見覚えのある地形となり、どうやらスキー・デボの予定地に来たようだ。

いよいよ、私たちは、永年の夢の対象と、ここに、向い合ったわけだ。のしかかるような岩壁の威容、素晴らしい新雪のつき具合だ。若し、私たちが、日本アルプスで最後まで残された、このすさまじい岩壁を登るつもりでやって来たのでなかったならば、いつものように、ただ手放して驚歎してさえいれば、それでこと足りたであろう。ところが、今日は事情が違っている。私たちは、これから何時間かかるかわからないが、とにかく戦かわねばならない最も手強い相手と、

いま相對しているわけなのだ。私たちは、喰い入るような目つきで、岩壁に刻み込まれた氷雪の筋を次々に頭の中で結びつけ、その上にルート追っていた。横尾谷の真中であつた、小さな岳樺の横にスキーをデボした。不用品は置いて行くことにしたが、もともと、いらぬものは持って来ていなかったので、スキーの外にデボに残したのは、アイゼンのケースだけだつた。

そうこうするうちに、壁の上部に、横尾尾根の稜線ごしに、朝日が当り始めた。急がねばならぬ。簡単に第一回の間食をとり、アイゼンとワカンを用いて、一直線に針葉樹の疎林のつづく斜面を登って行った。夏の、正面ルンゼと私が名づけた流水の作った溝は、全く埋れて分らないが、登るにつれて雪は次第に深くなり、遂に腰までもぐる始末。六時四十五分、正面岩壁直下の取付点へ登りついたときには、五日ぶりの太陽が、岩壁全体を照らし出していた。

壁というものは、それが垂直に近ければ尙のこと、真下まで近づいてしまうと、壁面は殆んど見えず、また傾斜も分らなくなつて、知らぬ者には却つて組し易く見えるものだ。しかし、この岩壁を熟知している私には、そのような錯覚による安易感など生れる筈もなかつた。夏期の初登以來、雪のない時ですら、如何にこの岩壁が恐ろしい悪場を並べたてて、登攀者に対抗しているか、私は知りすぎる程、知っている。ここから一旦、上の方に向つて登り始めたが最後、あとは徹頭徹尾、上へ上へと登る外はないのだ。一瞬、「止めるならば、今のうちだ。」というささやき

が、どこか私の心の中で聞かれた。〇はとみれば、心持蒼ざめた顔で、壁の下半分のルートになる急斜面についた氷雪を見上げている。

「さあ、行こう。」私は、自分の心に言いきかすように声をかけ、岩壁の裾のデブリで固められた雪壁を、アイゼンを利かせて登り始めた。途中、開きかけた龜裂をのり越え、一気に夏の出発点となるテラスを目がけて、攀じて行った。登ってみると、夏のテラスは、あとかたもなく、一様の雪の急斜面である。仕方なくピッケルで小さな棚を作り、二人並んで立ったまま小休止。ここで第二回の間食をとつてから、いよいよザイルをつけた。そして、不用になったワカンは、僅かに雪の上に梢の先をあらわしていた岳樺の枝に残して置くことにした。夏になって、誰かここへ来たら、木のてっぺんにワカンが二足ぶら下っているのを見て驚くだろう。そんなことを話し合つて、二人は笑つた。どうやら、私たちの心には、平素の冷静さが戻つて来たようだつた。

八時二十分、最初のオーバー・ハングに行き当つた。これをこえようと、中央壁の一端に取りつけるわけだ。夏なら腕の力で、ぐつとの上上つてしまうので、大した問題ではないところである。足場を作っていると、どうもアイゼンの手ごたえが変だ。ピッケルで新雪を掻き落とすと、下は意外にも一枚岩の上に、二十糎ほどの厚さに蒼氷が出来ている。私はこれに足場を刻みなおし、手掛もないままに、バランスだけに頼つて強引に登り切つてしまつた。

ここからは、岩壁の半分のところにあるテラスを目がけて、真上に向つて直登するばかりだ。

この頃から、南岳から槍へつづく稜線のあたりに黒い雲がかかり始めた。見る間に、横尾谷の上の方から吹雪いて来た。果てしなく続く、不安定な雪壁は、容赦なく私たちのエネルギーを奪って行った。ときおり、人の頭ほどの大きさのあるスノー・ボールが、私たちの前後左右を、小さな表層雪崩を誘発しながら落下してくる。よく冬に对岸から仰ぎみていると、岩壁の頭から滝のように落下する奴が、これなのだ。私もOも、小さな雪の弾丸を体や頭に、いくつかくらかったが、幸い致命的な雪崩には見舞われなかった。

ザイル一ぱいに交互に登って、八ピッチまでは覚えていた。そのあげく、少し左上方へ斜にのし上ると、予想通り「八高テラス」に出た。これは、かつての戦争のさなか、私がこの正面岩壁への最初の着手として、当時の新人Oとパーティを組んで、しゃにむに登りついた、思い出の場所だ。また、Oが今回の私の計画に参加する気持になった、その大きなファクターの一つが、このかつての夏の登高につながるものであったことも、私には想像に難くなかった。

夏は、緑の草におおわれ、ところどころ姫百合の花さえ添えた美しいテラスだが、今では乗ればそのまま数百米下の谷底に向って滑り出しそうな新雪が積っていて、とても正気では、その上に乗れた相談ではなかった。やむを得ずテラスの左肩の、ちょっとした岩のでっぱりの下のところの雪壁を、ピッケルで削って棚を作り、それをさらに叩き固めてから、ザイルでビレイをしたまま、ようやく腰を下ろすことが出来た。思い出したように時計をみると十一時。ここまで、

壁の下半分のところは、予定より一時間早く登り切った計算になる。ほっと、一息ついて、ルックからドーナツを出して食い、始めて水を少しばかり飲んだ。吹雪は、まだ止まないが、ときどき薄日が射す。四日間の荒天の名残りだと判断して、登攀を続行することに意見は一致したが、その頃から、頼みの淡い日影も翳り始めた。これで明日の朝まで、この東を向いた大岩壁には、日が当たらないことになる。急に、あたりが、冷えびえとしてくるのが感ぜられた。

\*  
\*

その日の午後、日蔭になった岩壁の中で、私たちが強いられた戦いの、想像を絶した苦闘について、ここでその詳細を述べないことにする。専門の登山家以外には、却って興味の薄いものと考えられるからだ。兎に角、技術的にも肉体的にも、岩壁は私たちの持っている力のすべてを出し尽すことを要求した。そして、いつの間にか、あたりに暮色が濃くなって来たことに気づいたとき、私たちは腰を下ろすことも出来ない悪場の真中に立ちつくしている自分たちの姿を見出したのであった。壁の三分の二位の高さの、新雪におおわれた急な一枚岩の上であった。

私たちは、ピッケルで雪をけずり、ようやく十五種くらいの幅の棚を作り、さらに雪と岩との間へピッケルを挿し込んで、どうやら尻の一部を乗せるところを作り出すことが出来た。体はザイルで上方に確保してあるので、転落の心配はないが、腰から下は完全に宙に浮いている、とい

った情けない有様だった。

油紙をはり合せて作った手製の携帯天幕を、すっぽり頭からかぶったが、むろん裾は開けっぱなしだ。やがて、常念岳の方向から月が出た。あいたツエルトの裾から、月光にぶく照らし出された横尾谷が、真下にみえた。夏ならば、絶えずこの岩壁に登る者の耳を打つ溪流の水音はなく、谷一帯には、不気味な静寂が支配していた。

その冬の岩壁の中で一夜の、苦しかった思い出は、もう殆んど記憶が薄れてしまっている。ただ、直接外気に曝されている足がじんじんと痛むので、たえず靴の中で足指を動かしていたことだけを、おぼえている。

翌日、夜の明けるのを待ちかね、午前五時頃から登攀を再開した。再び、困難な登攀が始まったが、夜の厳しい寒気にたえて、じつとくまってしまう苦痛に比べたら、まだしもだった。

この二日目の登攀は、快晴にめぐまれた。前日の正午ごろから翳ってしまった、この大岩壁に、さんさんと陽光がふりそそいだ。名残りの吹雪も、すっかり止んで、困難な割に、楽しい登高であった。そして、午後一時過ぎ、小さな雪庇を蹴やぶるようにして、私たちは正面岩壁の頭、雪の円頂に並んで立った。

\*\*\*

あれほど、夢にまで見た、この岩壁の初登をとげ、それを私の足の下にふんまえて立ったとき、意外にも淡々たる気持で、〇と二人、とりとめもない雑談を交していたのを、はっきりと覚えていいる。ただ、昨日の朝、私たちが出発した横尾谷が、遙か直下の方で、一本のかぼそい糸のようにくねり、それが出合いのあたりで、槍沢の方からきた、今一つの細い糸と、もつれあうように一つになって、梓川の川床をつくっている様が、特に印象的であったことを、今もときおり思い出す。すっかり雪でおきかえられた、このあたりの溪流。しかし、その雪の底には、ほそほそながら、もう春の水が流れ始めているに違いない。そのような連想のために、この眺めが一層ふかく、私の記憶の中に刻み込まれることにもなったのだろうか。

困難な壁の登攀は、確かに終りを告げていたが、私たちには、まだ、そこから屏風の頭をこえ、さらに北尾根との最低鞍部をへて、涸沢の底へ下り、谷づたいに大きく迂回して、出発点のスキー・デボまで戻り、そしてまた徳沢まで帰るといった、非常に長い帰途のコースが、残されていたのだった。

最低鞍部から、新しいデブリを踏んで、涸沢へ下り始めたときには、奥穂高の黒い影が、すっかり雪の圏谷をおおい始めていた。涸沢の谷底へつき、さらに横尾谷の出合いへ向って、とぼとぼと下ってゆくと、やがて二日目の夜が訪れて来た。再び懐中電燈をルックから取り出し、その淡い光をたよりに、アイゼンだけのため、ごほごほと雪の中へもぐりながら下降をつづけ、ス

キー・デボの岳樺の木のところへ戻りついたのは、午後の八時少しまえ。依然として天気は持ちこたえており、左岸の落葉松の梢ごしに、大きな月が出ていた。

デボの位置からは、昨朝の私たちが踏み込んで登って行った、ワカンの跡が、夜目にもくっきりと壁の裾の方へつづき、それを追って目をあげると、黒々とした正面岩壁が聳えていた。その、あたかも、倒れかかってくるような岩壁の威容は、昨日の朝と、あるいは、それが形づくられた時から、ずっとそうであったのと、今も少しも変わらない。となれば、私たちの二日間の悪戦苦闘は、夢であったか。

夢に違いなかった。二人の若者が、これといった現実的な報酬も願わず、いわば、ただ上へ上へと登ること以外に、何一つ目的らしいものを持たずにまる二日間、この雪におおわれた岩壁の中で、生命の炎をもやして来たということ。私たちは、正しく夢をみていたに違いなかった。

まだこれから、二時間もスキーを走らせなければ、待望の寝床のまわっている徳沢まで帰れないのだ、ということも忘れて、私とOとは、しばし放心したような眠つきで、岩壁のシルエットを見上げていた。

### 下山もまた楽し

よくラッセルされた尾根筋のトレースを、鼻歌まじりで下って行った。全身の余けいな力は、ことごとく抜きとって、ふらりふらりと、俗にいう「蛸おどり」である。早くも陽は国境尾根の向うに落ち、夕方の影がひろがり始めた雪面に、アイゼンが快く喰い込んでいく。驚くほど早く高度が下る。

静かな雪山の夕暮。つい、数時間前までの荒天は、まるで嘘のようだ。そして、この雪の山稜を下って行く私の、異常なまでにうきうきとした気持は、どうしたことであろう。やがて、足下に、すっかり夕闇をただよわせた大川沢を見下ろす急斜面の辺りまでくると、私は遂に大声をあげて、「峠の我が家」を歌い出した。調子外れは勿論のことである。

ただ一人で、雪山の中を、何の憂いもなく漫歩しているたのしさ。もはや奇妙な固苦しさを強いる新人も、後に続いてはいない、といった心やすさ。いや、この羽目の外れた陽気さは、ただそれだけの、ありふれた理由だけではなかったようだ。

——まだ、ついこの間のように思えるのだが、指折り数えてみると、はや十二年余り。一昔以上も前の話である。いうまでもなく、戦時中のこと。積雪期の山へ入る山岳団体が、ほとんどな

くたった、或る年の三月下旬のことであった。

私は、出身校の高校(旧制)の若い部員たちと一緒に、鹿島槍の東尾根に入った。その前年に、大学に入ったばかりの私は、全くはちきれんばかりの元気で、今では家庭をもち子供まである当時の現役部員の一人が、いまだに、しばしば私を冷やかす言葉をかければ、「いやはや、凄げえファイトの塊り」であった。

冷沢の合合から左岸を三十分ほど登ったところ、小さな枝尾根のはしの台地の、落葉松の疎林の中にベース・キャンプを張り、東尾根を末端から、忠実に攻めていった。入山の直前に、春先の馬鹿雪がふり、そこから尾根筋までの急斜面は、胸までもぐる、ひどいラッセルだった。それも、私は新人と同じ重さの荷を負って二時間余り、先頭切って登って行った。

第一キャンプは、一ノ沢の頭を予定していたが、深雪のため、とても行きつけず、一つ手前の尾根筋が、「くの字」に曲っていると、ちょっとした窪みに設けられた。テントは、十年近くも使って、ほとんど命数の尽きた五人用ウインバー。それでも内張りだけは、感心につけてあった。何しろ、あの物の乏しい頃のことだ。いまいちいち正確な記憶は残されていないが、随分と食糧も粗末なものであったようだ。隊全体に、ただ一罐だけあったドライミルクが、貴重品あつかいをうけ、なかなか開けられなかった位だから。

第二キャンプは、第二岩峰の手前で、これはテントがないので雪洞になった。そして、計画が

このあたりまで進んだ頃から、再び天候が崩れ始めた。もともと、手の抜けな解剖学の実習を、学友によりしく頼んで、僅かな日数を盗むようにして出かけて来た私には、もはや北槍の頭をふむ機会は失われたものと、観念せねばならなかった。

それでも、思い切り悪く、最後の日の昼過ぎまでねばってから、ちらちらと粉雪をまじえたガス中を、若い隊員たちと別れて、下り始めた。ときおり、灰色のカーテンを通して薄日がさし、私の左手には、荒沢の奥壁が、驚くほどの手近かに、その絶望的な相貌を現わしては消えた。

やがて、第一キャンプまで来た。二人の若い部員がいて、私のルックサックを受取り、テントの中へ入れかけたが、鹿島まで下ると聞いて、ちょっと驚いた表情だった。それでは、というので、あまり豊かでない食糧の中から、ビスケットやら何やら出して、即席の、ささやかな別離の宴を張ってくれたのは、嬉しかった。そして、最後に琺瑯の食器に、なみなみと濃い液体をついで、どうぞ、とすすめた。

私は、何気なく受取って一口ぐつと飲んで、思わず歓声を発した。どこにしまっていたのか、それは葡萄酒だった。ガスの中とはいえ、雪稜の上り下りで、乾き気味の喉に、それが如何に甘美に感ぜられたことか。私は、一息にのみほし、ふっ……と溜息をついた。

手を振って、見送ってくれる部員の声を背中に聞いて、私は一人で夕暮れの中へ降りて行った。シュプールは程よく凍っており、全く快適な雪山の散策である。たちまちにして、五百米ほ

どの高度を降りてしまひ、水色のモヤのようなものが、立ちこめかけた大川沢を見下ろす斜面までやって来たのだが……。

それから、いけなかった。何に、葡萄酒ぐらい、と気にも止めなかったものの、私の血管には、明らかに熱を帯びた血が流れ始めていた。それでも、無人のベース・キャンプまでの下りは、まだしもよかった。そこで、アイゼンをスキーにかえ、一気に出合に向って滑り出したのだが、河原に出るか出ないうちに、忽ちふらふらと雪の中へ倒れ込んだ。

酔いのため、平衡を司る反射が全くなり、起きたと思つたら、また倒れた。倒れながらも、不思議と実に気持がよいのである。雪の中に、わざと深く顔を埋め、私は本当に楽しい気持だった。一瞬、私の脳裏からは、望みのない祖国の行くすえのことも、そして今しがた諦めて下つて来た山頂のことまでも、どこか遠くの方へ消え去ってしまひ、私はただ、頬にふれる雪の感触を、無心にたのしんでいた。

## 涸沢の秋

——茨木さんの想い出——

降っている、という雨ではない。それでいて、五分も登っていると、上衣の襟元が、しっとりと濡れてくる。俗に「ぎりしょん」という、そのもう一つこまかな、雨滴であった。

出合の丸木橋を渡つてからの、屏風の下つづら折りは、まるで神社の石段のような、登りやすい道だが、流石に季節は争えず、両側の、灌木の枝葉の繁みも薄れて、横尾谷の溪流の音が、心持ち際立って聞き取れるのも、あながち、昨夜来の小雨のせいばかりではないようだ。

道の傾斜もゆるくなり、落葉松の疎林の中を抜けて、小さな尾根を越えようと、例の如く涸沢の圏谷が……と、別に気にもとめないで、足もとだけを見つめて登って行くと、私はふと、周囲のただならぬ気配に、思わず足を止めた。あつ、思わず叫び声が、口をついて出た。何という、素晴らしい色彩の氾乱であらうか。赤、紅、いな、私の網膜が未だかつて映し出したことのない鮮かな色が、涸沢の谷筋を埋めつくし、それが乳白色の霧の中で、上へ上へと果てしなく続いて、あたかも天国への階段のように眺められた。

涸沢の紅葉。この紅葉という、既成の概念を、根底から覆えず見事な色の構成で、まるで夢を

みているような谷の風景を現出するのは、九月の末か、十月の始めの僅か数日間、しかも、最も美しさがきわまるのは、ただの一日——の中の、ほんの数時間に過ぎないという。私は幸運にも、その「黄金時間」に行き合せたのだ。惨めな戦いの終局も近い、ある年の秋のことだった。

一月余り前まで、あれほど豊かに残っていた雪が、あたかも神かくしに会ったように、消えさせたあの圍谷壁は、がらがらの岩屑だけで満たされた、秋の澗沢。茨木（猪之吉画伯）さんが、この荒涼たる谷を登って行ったまま、永遠に帰ってくるのがなかったのも、やはり同じ初秋の頃だった。

ひげだらけの童顔。円い鼻と黄色い歯。骨太のがっしりした体格。いかにも親しみやすい風格の人であったが、いつか奥又白の本谷のあたりで、スケッチをしながら、対象の風景を見つめていた眼光の鋭さは、今でもありありと目に浮ぶようだ。

その谷の奥で三日三晩、猛烈な台風性の雨に叩かれ、茨木さんと明大の助川君と私の三人は、奥又白の池のほとりでの生活を諦め、暗れるのを待って、そうそうに上高地へひき揚げた。

その日の夕方、西糸屋の古ぼけた浴槽の中で、茨木さんは私に、若し将来、何か山の本を出版することがあったら、装幀をやってあげよう、と約束して下さった。何一つ、本を書くなど、夢想だにしていなかった頃のこととて、まるでままごと遊びの子供の、婚約のちかいのような話だ

ったが、そのときの茨木さんの気持は、今でも思いだすたびごとに、温いものが私の胸にわいてくる。

その茨木さんが、穂高で行方不明になった、との助川君からの電報で、取るものもとりにあえず、上高地へかけつけると、J・A・Cの理事の交野さん、田辺さん、それに塚本繁松さんの三人が、一通りの搜索を終えて、戻ってみえたところだった。助川君は、その翌日の夕方近く、冷たい秋雨のふりしきる中を、番傘片手に、徳本峠を越えてやって来た。

澗沢では、池の平のあたりから新雪をふんだ助川君と私は、約一カ月前に、茨木さんが辿ったと思われる道を、穂高小屋へと登っていった。澗沢の圍谷は、新雪を得て、ほっと生き返ったような景観であった。九月末の、荒涼たる妖気が拭い去られて、谷全体が明るさを増していた。登るに従って雪は深くなり、鞍部の直下の吹きだまりでは、二人とも腰まで埋もる有様だった。

私たちの搜索も、得るところなく終わった。茨木さんの遺体は、遂にどこにも発見されなかった。永久に、人間の世界から姿を消してしまった、このやり方は、如何にも茨木さんにふさわしいものだ、と助川君が、しみじみ独りごとのように言った。

しかし私は、全くの直感に過ぎなかったのだが、白出の滝のあたりが疑わしいと思った。穂高小屋から飛騨側への下りに、滝の上縁に出たとき、私は茨木さんが呼んだような幻覚に襲われたからである。ただ何かの偶然であったに違いない。だが、戦後になって、この白出の滝の下の雪

溪の末端から、ずたずたになつた茨木さんのルックと画帳が発見されたのだ。

秋風が愁傷を運んでくるといふが、私の秋の涸沢の想い出もまた、この一色の感傷にぬりつぷされている。街に秋風が吹き始めると、私はきまって、これらのことを思い出す——。涸沢のこの世のものと思われぬ紅葉の美しさ、がらがらの岩屑の堆積と、その上をたった一人で登って行った、茨木さんの、いかつい後姿。そして、眠るかのよう眼を閉ぢた童顔の上に、純白の粉雪がふりつんで行く……。

幼い感傷に過ぎないのである。それを、年毎に秋がくると、そつと追憶の舞台にのせて、いつくしむ。背景の書き割りは、秋の涸沢。それでよい、と思つてゐる。

私たちも、もう新しい感傷など、とても感受出来ない年齢になつてしまつた。それに、時代も大きく変つたようである。

## 『岳人』誕生

まだ汽車の切符が自由に購入出来なかつた頃（昭和廿二年）の、一月の元日早々のことであつた。私とIと、それに当時の新人Sの三人は、京都駅で東海道線の切符を買いそびれて、仕方なく電車で大きく遠廻りをして名古屋へ向う途中であつた。

冬山に白馬岳の東面をやろうと、困難な食糧事情にもかかわらず、無理を重ねてルックサックをふくらませ、やつと都会の生活から抜け出して来たのだつた。

連絡の悪い乗換えを、いくつも行い、あげくがルックを通路に並べ、その上に腰を下ろすが、やつとといった有様であつたが、丁度、三重県の津をすぎるあたりだつたと記憶している。私はふと隣のIに、かねて夢に描いていた、「若い登山家の手で純粹な山岳雑誌を創り上げる構想」について話してみた。

しばらく腕ぐみをして、じつと聞き入つていたIは、「そりゃ面白い。」と、即座に賛成してくれた。彼は大阪でも有数の毛織問屋の御曹司で、その関係上、当時はまた京大法科の一学生だつたけれど、いろいろと経済界の動きに詳しいという理由で、営業面を担当することにし、私は同人雑誌の二、三の経験から、編集を主宰することに話が決つた。

それでは、雑誌の名は何とつけようか。「蒼氷」「岩壁」そんな尖鋭な感覚を表現する名前が私の脳裡に浮んだが、いずれも幅に乏しい感じで、気がすすまなかった。そのとき、横でIが、「山岳の岳に人——『岳人』というのぼどやろ。」と独白のように呟いた。この言葉は、天来の福音のよう、私達の耳に鳴り渡った。がくじん——。なんとという力強い、しかも親しみのある響きであらう。このようなよい言葉が手近にあるのに、どうして気がつかなかったのか。「岳人」、それに決めた。私は思わず車内で立ち上って叫んだ。

\*  
\*

そのときの山行も、今から思えば楽しいことばかりであった。一夜、白馬尻の雪の中でヴィバークし、厳しい寒さに凍える足をふみならしながら、私とIとは、再びこの『岳人』創刊の計画について夢を語り合った。山を下りたら、早速取りかかるべき、いろいろな事務のことなど、眠れぬままに細ごまと打合せた。夜は次第に更け、ツェルトの内側には霜の結晶が、その輝きを増して行ったが、話はいつ果てるとも知れなかった。

山行の目標は、その当時まだ未登のまま残されていた厳冬期の白馬岳主稜の初登攀をねらうものだった。月の出る午前三時頃よりこの仮泊地を出発、月明を利用して、一気に尾根の稜線までのし上り、天候の崩れが予想される午後までに勝敗を決して頂上をきわめ、大雪溪に逃げ込もうと

いう作戦だった。

予定通りの時間に、アイゼンの紐を締め直し、ツェルトを払いのけて外に出ると、凜とした寒気が体をつつみ、見上げる白馬頂上附近では、星のまたたきが、殊の外うつくしかった。「さあ、いくぞ。」と白馬沢の出会いに向って歩き出し、ものの半時間も進んでから、右側の適当な斜面に取りついた。

アイゼンとワカンを併用していたが、それでも、ラッセルは膝までであった。あえぎあえぎ電光形に登路をとり、二時間足らずで尾根筋へ出た。そして登るに従って、次第に夜が明けて来たわけだが、何たることか——。私たちは、尾根を一つ取り違えて、白馬の北につづく小蓮華岳へ到る尾根に登ることが分ったのである。

失望は小さくなかった。が、私たちには、いつもの場合ほどには、こたえなかった。私たちの胸には、もう一つの新しい夢が醗酵し始めていたものだから。小蓮華岳の頂上へ出たのが十時を少し廻った頃。それから国境尾根のクラストした凍雪にアイゼンを利かせて、すっ飛ばし、正午すぎ白馬の頂上についた頃には、早くも黒部をへだてた剋岳の方から吹雪いて来た。

私たちは、一目散に村営小屋のクルマまで下り、既に生あたたかいガスが上り始めていた大雪溪に駆け込んだ。いつもなら、後髪を引かれる思いのする下山だったが、このときは、少しばかり事情が違っていた。ときどき吹きだまりの深雪に踏み込んで、前に、つんのめりそうになりなが

ら、私の頭の中では、野心的な編集プランが、うずを巻いていた。

\*\*\*

下山後、最初に着手したことは、事務所の設立であった。これは、『詩帳』という詩の同人雑誌の編集をしていた関係上、詩人であり出版業主である臼井喜之介氏の好意によって、京大北門前の臼井書房の一隅を貸して頂くことが出来た。

と、いうと、なかなか立派に聞えるのだが、実際は表札は出したものの、机は空いているのを、その時によって使わせてもらい、その他には郵便物入れの箱が一つあるだけ、といった有様だった。これが十三号までの『岳人編集部』となったのである。

Iがどのようにして資本を調達したか、私は詳しいことは知らない。他人に頼ることの嫌いな彼のことだから、親に無心をいったりするようなことは、先ず出来る筈もなかつた。たとえ言っても、全く雲をつかむようなこの話が、関西でも有数の実業家である彼の父君に受け入れられ見込みも、ありそうには思えなかつた。

それはともあれ、編集を受持つ私としては、まず創刊号の原稿を揃えねばならない。執筆者の予定表を、便箋の上に書き出し、それを一枚もって、私が最初に訪ねたのは、朝日大阪本社の藤木九三氏であった。私のこの突然の訪問と、原稿の依頼には、流石の藤木さんも随分と驚かれた

ようだった。そのときの印象について、氏のかかれた次の一文からみても、それは容易に察せられるのである。

「……ちょうどその頃、突然京大生だという若い岳人が、社にわたしを訪ねて来た。名刺には伊藤洋平とあり、用件を聞くと、今度仲間で、『岳人』という山岳雑誌を発行するについて、何か指導的な所感でも書いてほしいという依頼だった。実のところ私は驚いた。一般の山岳雑誌でもなかなか経営が難かしいのに、学生が山岳雑誌を経営して果して成立つだろうか。他人の事ながら、一応の所感をのべて原稿を書く約束をしたのだった……。」（『朝日スポーツ』第七五八号より）

\*\*\*

藤木さんばかりでなく、多くの方々が、この全く海のものと山のものともわからぬ雑誌のために、またこの馬の骨とも知れぬ一介の学生の編集者のために、快く原稿の筆を染めて下さったことは、私の生涯忘れえない嬉しい出来事だった。そして、この時ほど、山という縁に結ばれた人々の善意を、しみじみと感じさせられたことはなかった。

編集の根本方針は、『実践』ということに焦点が合わされた。次に紹介するのは、創刊予告の葉書に書いた挨拶と広告とをかねた一文だが、それに書き加えられた第一号、及び第二号の内容をみれば、その当時に正に当るべからざる編集者の心意気が、うかがわれようというものだ。

新山岳雑誌

岳人

五月創刊

小誌は現に実践的な活動を続けている登山家達により編集、経営一切の事務を担当致して居ります。かかる事情をお含みの上、何とぞ諸岳友の御支援を賜り度く存じます。既に予約受附を開始致して居ります。

一部 七円(半年四十円)小為替にて御申込下さい。

京都市北白川京大北門前白井書房内

岳人編集部

第一号

一つの構想

鈴木 信

一の倉沢本谷

渡辺 兵力

鹿島槍東面壁

佐谷 健吉

謎の山アムネ・マチン(上)

藤木 九三

“岳人”に寄す

今西 錦司

西岡 一雄

奥穂高南面

村山 圭介

カール・ウィーン

伊藤 洋平

カンチエンジュンガの天候

F・スマイス(訳)

一月の白馬岳(記録)

岳人 社

第二号

登攀より得たもの

高橋 健治

タルハン・オーラ

中尾 佐助

屏風岩Iルンゼ

梶本 徳次郎

五龍岳東面

前田 光雄

謎の山アムネ・マチン(下)

藤木 九三

“岳人”に寄す

加納 一郎

高須 茂

単独行者

島田 真之介

剣岳東面

藤平 正夫

カンチへの試み

ギラモンド

池田 孝蔵(訳)

かくて、原稿もおいおい集まり、印刷所も私の知人にあたる大宝印刷所が引受けてくれて、その年の三月半ばには、初校が出るところまで漕ぎつけた。私もIも、慣れぬ手つきで、校正の朱

筆を握った。それから、当時は嚴重な統制下にあった用紙の配給割当申請、広告の手配など、まるで目の回る忙しさであった。

果して、経営が成り立つかどうか、そのような疑問は、もはや私たちの念頭には、少しの翳をも投げかけることはなかった。陳腐な表現だが、ただもう夢中であった、という外はない。そして、そのように私たちが、一つのことに熱中することが出来る、若い幸福な年令にあったのもよかった。

\*\*\*

本文の印刷は次第に進行していった。やがて、校了の日も近づくにしたがい、雑誌の顔ともいふべき表紙の問題が、繰り返し論議された。まだ、漸く復刊をはじめた一流の綜合雑誌ですら、ザラ紙の表紙を使っていた時期であり、誰もこればかりは、さっぱり自信がもてなかった。

とにかく、写真を使うこと。それにはアート紙を使用しなければならぬこと。題字は赤で抜くこと。これだけのことが決るまでにまる十日間を要した事実からみても、その苦心のほどが察せられるのである。それでも、まだ具体的なプランからは、ほど遠い有様であった。

とかくするうちに、本文はいよいよ校了になり、印刷所の方からは、表紙の原稿を一刻も早く、と矢のような催促である。写真の方は、それでもラキオット氷河の上を登って行く独逸のナ

ンガ・バルバット隊の撮ったものを複写して使うことに決ったが、最後まで残ったのは題字である。専門家に依頼するだけの余裕もなく、切羽詰ったあげく、私は文房具屋で方眼紙を買って来て、たどたどしい線を引き始めた。

さて出来上ってみると、案外にまともな出来ばえで、この題字の原稿が、今日までの各号のデザインの基本になったとは、全く意地悪い運命の悪戯ではあった。

それでも、アートをつかった表紙というのは、私たちの鼻を若干高くした。というのも、当時全国で発行されていた雑誌の中で、このアート紙を使用していたものは、一つもなかったからである。

本文も表紙も刷り上って、いよいよ製本に入ったと聞いた夜、私は床の中でなかなか寝つかれなかった。新しいものを創り出す限りない喜びと、とんでもない誤算をしているのではないか、といった危惧の念とが交錯して、題字の赤く抜いた『岳人』の二字が、いつまでも頭の中で、ぐるぐる回転していた。

\*\*\*

翌日の正午近くであった。当時、大阪の家が戦災をうけて、一時寓居を構えていた京都のIの家へ、遂に創刊号一千部が運び込まれた。

その知らせに、私が飛んで行くと、出て来られたIのお母さんは、にこにこ笑いながら、「ずい分うすい雑誌ですわ」と、それでも理解のある、やさしい声であった。

その一部を手にとると、私とIとは、一頁一頁むさぼるように読んだ。初校、再校と通読して、どの稿もほとんど暗誦している位だったが、それでも読まずにはおられなかった。

ややあって、二人が顔を見合せたとき、「若し大半が返本になって戻って来たらどうしよう。」と、心配顔でいうと、Iは、「これだけあったら、二年ぐらいチリ紙にはこと缺かぬさ。」と、実業家の卵らしい太っ腹なところを、ちよっぴりみせて、冗談にまぎらしてしまった。ともあれ、このようにして、数知れぬ人々の祝福と支援に助けられて、私たちの夢、『岳人』は、遂に誕生したのであった。

次の日、私とIは、編集室で発送する小包の包装に、まる一日を費した。小包が出来ると、臼井さんの奥さんから乳母車をかりて、百万遍の郵便局まで運んだ。それから、市内の十軒あまりの本屋へ、直接配るために、黄昏の街へ出て行った。

\*\*\*

これは、『岳人』物語のほんの発端にすぎない。これに次いで、まだまだ波瀾万丈の挿話が、つぎつぎと登場するわけである。

たとえば、執筆者には一切稿料を払わず、また関係者もすべて無料奉仕で行った、いわば「人件費ゼロ」といった「超現実的経営法」の話。広告をとり、大学の講義をサボって大阪の葉問屋街の道修町界隈を終日歩き廻った話、等々。いずれ、またの機会に譲ることにしたい。

それにしても、これだけは蛇足と知りつつも是非とも附加えたい一連の事実がある。それは、窮迫した敗戦直後の不安な社会情勢のさなかにあつて、『岳人』と接触をもたれたすべての人々が、全く無条件に、好意と声援とをもって、この雑誌の誕生を迎えて下さったことである。これだけの、厚情に包まれて生れ出た雑誌であつてみれば、やがて第百号も出ようという今日の盛運を招くことが出来たのも、あるいは当然のことなかも知れない。これからみても、私もIもただ花粉を運ぶ蝶の役目をしたに過ぎず、本当の『岳人』を生み出したのは、わが登山界の新らしい息吹きに外ならなかったのだ、と断言しても、決して過言ではないと、しみじみ感じられるのである。

## 「知床」冬の旅

### 野性の誘惑

日本の最東北端。北海道を魚の形になぞらえると、その上顎の「ひげ」にあたる部分、それが知床（しれとこ）半島である。

オホーツク海を背にうけて、知床岬の先端に至るまで六十軒余り、東は根室海峡をへだてて、ソ連領の千島と相對しているこの半島は、四島国のが国の中に残された、少数の、最も人煙稀れな地域の一つである。

聳立する断崖、その裾を洗う北海の波濤、千古不伐の針葉樹の原始林とその奥にそびえる処女峰群……。これらの中には、まさしく荒々しい大自然の息吹が感ぜられた。そして、このむせるような野性の臭いに誘われて、私は何人かの仲間と一緒に、ある年の真冬の四十日間を、この北辺の、雪と氷の世界の中で過すことになったのである。

京都をたったのは、十二月十一日夜半の「日本海」号。それから、三日三晩、昼夜兼行の旅路のはてに、客車の中央で、円形の古風なストーブをもやしている愉快な列車が、がたり、と止ったのは、車内で迎えた四日目の夜の、時刻は七時に近い頃であった。

国鉄標津（しべつ）線の終点、根室標津。七十時間余りも、固い三等車の客席に坐り続けて、すっかり硬直した思いの手足をさすりながら、飛行機ならとくにニューヨークに、いやコメット機ならロンドンについている筈だと、つい先頃まで愚痴っていたのも忘れて、いそいそと荷物をまとめ、凍りついたプラットフォームに下り立った。

雪の曠野の中に、ただ一つ、ぽつんと置き忘れられたような寒駅。零下二十度の、膚を刺すような厳しい夜気。ちらちらと粉雪の舞う中に、下交渉や準備のために、数日前に先発した仲間が、毛皮をつけたフードを深ぶかとかぶった格好で、出迎えに立っていた。

用意されていた櫛に、各々十二貫近くあるルックサックやスキーなど山と積んで、よく除雪された雪明りの道を、その夜の宿泊を、町当局の好意によって特に許された公民館に向った。

歩きながら、スキー靴を、雪の中に蹴込むと、さっと小さな雪煙が舞い上る。抵抗のない、軽やかな粉雪だ。よくも、はるばると北の果てまで来たものだ、と思う。

公民館では、全く親切なもてなしをうけ、畳の上で、久しぶりに手足を、ぐっと思いきり伸して寝ることが出来、長途の旅のつかれなど、一度にけし飛んでしまった思いだった。

翌朝八時、幸いにも、まだ通じていたバスに便乗して、目指す羅臼（らうす）に向った。標津の町から、さらに海岸ぞいに四十八軒。もう一と吹雪くれば、春までは交通が完全に杜絶してしまうという、際どい積雪の中の道を、タイヤにまきつけた鎖の音もにぎやかに、つっ走ること四時

間。植別(うえんべつ)、陸志別(りくしべつ)、春新古丹(しゅむかりこたん)、などといった、アイヌ名の村落をすぎ、待望の羅臼についたのは、十四日の正午に近い頃であった。

#### 鳥と昆布の村

羅臼は知床半島の、いわば要(かなめ)に位している。人口九百六十余りの小部落だが、この沿岸では、根室港に次ぐ漁港で、鱈・スケソ・鯿・鮭・鱒・鳥賊・大鯿など、年額三億五千万円を越える漁獲高を示している。

そのとれた魚の廃物などを、ねらって集まるのか、バスを下りて、まず驚かされたのは、鳥の群れである。道端に、屋根の上に、真っ黒い大きな鳥が、わがもの顔に歩いている。手を振り上げて脅してみても、しゃあしゃあとしていて、一向に逃げる気ぶりも示さない傍若無人ぶりだ。

漁撈とならんで、あるいはそれ以上に重要な産業は、このあたりから岬にかけての海岸一帯で、昆布の採取である。「目梨(めなし)昆布」というのが、それで、品質がよいので有名である。主として、大阪の間屋筋へ出荷されているという。

採取の最盛期、七月の下旬ともなれば、この羅臼の人たちは、こぞって岬へかけての海岸ぞいにある番屋へ出かけていく。昆布が取れるのは、波打際から、せいゝ数十米の浅いところで、小舟にのり、竹の竿のようなものに、巻きつけるようにして引き上げるのである。

村の中を歩くと、開拓地特有のバラック造りだが、木口のあたらしい新築の家が、あちこちに目立ち、思ったより裕福そうな暮しぶりだ。聞くところによると、一昨年昆布が豊漁で、いずれも、そのときの「昆布が建てた新家」だ、とのことだった。

昆布といえは、行く先が、その本場であると、知ってか知らずか、携行した登山食糧の中に、「ところこんぶ」が加えられていた。ところが、土地の人は、これを見て何だ、と聞く始末に、却ってこちらが面喰った。まさか、と狐につままれたような思いで、すすめてみると、口にふくんでみて、なかなかうまい、との返事は、まんざら嘘ではなさそうだった。あとで考えてみると、ここでは長い昆布を干したまま出荷してしまうので、都会へついでに行われる加工品などは、却って見る機会がないのも、もつともな話だと、領つかれた。何か偶話にでもなりそうな、一つの挿話だった。

羅臼の村は、海のすぐ近くまで山がせまり、その間の、ごく僅かな平地に、一つかみの隣寸の軸木をならべたような感じの家並がみられる。村で二つしかないお寺の一つ、誠諦寺は、少し高みの山際に立っていた。

住職の西井さんは、この土地の開拓者の一人。夏に偵察に来た仲間が、厄介になった縁で、かねてお願いしてあった通り、快くお宅の離れを私たちの宿舎に提供された。その炉辺で鮭のルイビ(凍らせたまま、薄く刺身のように切ったもの)をさかんに、ささやかな前祝の宴を開いて下さっ

た心尽しは、忘れられない。

西井さんも、なかなかの山好きで、もちろん夏だけだが、すぐ村の背後にそびえている羅臼岳にも数回登っており、この村では一番の権威だとのこと。その上、住職という職業から、豊富な話題の持主で、この地方の、いかにも北の辺境らしい、興味ぶかい話を、いくつか聞くことが出来た。

「始り」と「終り」

羅臼というのは、アイヌ語のラウシのなまりで、その昔、狩に出たアイヌ人が、鹿や熊を捕えてくると、必ずここで屠り、臓腑や骨などを、ここに捨てた。その臓腑や骨のある場所、という意味だという。

それほど、かつてここにはアイヌが多く住んでいたらしく、残っている穴窟の数などから推定されるころでは、現在の村の人口を遙かに上廻る数になるといふ。この附近に、特に多く住みついていた理由としては、海流の関係で、冬も比較的しのぎやすく、また川という川には、鮭の大群がひしめいており、山には熊や鹿が繁殖して、非常に暮しやすい土地であった為だ、と考えられている。

ところが、昨今では、濫獲のために鮭は減り、孵化場を設けて、稚魚の育成をしなければならぬ有様。しかし、熊は、今でも村の附近にしばしば出没する。現に数カ月前にも、小学校の校庭で、子供たちがラジオの音楽に合せて遊戯をしていた、そのすぐ二十米ほど山手のところを、二匹の仔をつれた雌熊が、悠々と歩いていったという。

先住民族といえは、ずっと後になって、松前藩が、道内の治権を一手に収めるようになった頃、こんな話がある。先住民族たちにも、一種の租税として、鮭、昆布などを、いわば物納の形態で納めさせていたが、それを直接取り立てる末端の役人が、彼等の無智で従順なのを奇貨として、随分と酷いことをした有様が、文献に残っている。

例えば、鮭や昆布の数をかぞえる場合、

「始り、一、二、三……十、終り。」

といった具合で、十を数えるのに「始り」と「終り」を加えて、十二を取り立てるといった悪辣なやり方をした。そのために、たまりかねた先住民族たちが、叛乱を起すと、得たりとばかりに討伐され、亡ぼされてしまい、終には全く、その姿を消してしまうことになったのである。

この先住民族は「蝦夷」といわれ、現在のアイヌとは、また別の種族だといわれているが、詳しいことは分らない。とにかく、現今では、全く滅亡してしまっていることだけは確かである。

「アイヌといえは」と、西井さんは杯を口へ運びながら、「内地の人たちは、北海道のこのような辺境に住んでいるわれわれを、アイヌの子孫か、せいぜい混血ぐらいに考えているらしい。が、

それはとんでもない間違いで、現在この羅臼の住人たちは、みなれっきとした日本人ばかりです。」と、一語一句をたみこむように、力説した。

この村の人たちの出身地は、富山県を中心とした北陸出が圧倒的に多く、現在では移住した開拓者たちから数えて、二代目から三代目の世代に移行しているとのこと。

さらさらと、二重窓のガラスに、吹きつけられる雪の音を耳にしながらか、炉辺の楽しい語らいは、いつ尽きるとも知れなかった。暖い部屋。家庭的な雰囲気。それらの中で、ラジオから流れ出る静かな音楽を、聞くともなく耳にしながらか、話しつつづづけていると、いつしか、このような日本の東北端にきていることも、頭から薄れがちである。

ときおり、はっとして我に返ると、私たちには、これから先の計画の重大さが思い起され、いつまでも楽しさにまかせて、夜更しをすることも許されず、厚意を謝して、寝袋の中へ、もぐり込んだ。

### 知床岬へ

夜半過ぎから、吹き始めた猛烈な北西の季節風に、この分では、少なくとも二、三日は船待ちだと、諦めきって寝入ったが、まだ明けやらぬ五時頃、はげしく雨戸を叩く者があった。

開けてみると、かねて契約をしてあった船長からの使いで、風向きが少し良くなりそうな気配

なので、今、焼玉エンジンの玉を焼いているところだから、すぐ棧橋まで来てくれ、という。一同、大あわてで飛び起き、ルックとスキーを担いで、羅臼港へかけつけた。

十四人の生命を一カ月余り支えるための衣食住一切、それに厳冬の登山用具を含めた大変な荷物の山。その積み込みも無事終って、十五噸の運搬船「日の丸」が、焼玉機関の音も勇ましく、羅臼を出港したのは、午前六時。船長は、とても岬まで行きつける自信はないが、行けるところまで頑張ってみるから、一切まかせてくれ、との話である。この分ならば、首尾はまずまずと、胸を撫で下ろした。

ここで、私達の計画に、少しふれると——知床半島には、数次の大爆発で出来たという羅臼岳、硫黄山、知床岳、等の各連峰が、その脊稜に並んでいる。これらの山々は、まだ冬期には足跡を印したものがなく、また知床岳から北へ二十軒、岬の尖端に至る山稜は、夏期における踏査の記録すらもない、全くの処女地帯なのである。わざわざこの知床半島の冬を目指してやって来た私達の主な目的は、各連峰の登頂と同時に、この未知の地帯の踏破にあったことは、言を俟たないところ。そのために、岬パーティと呼んだ一隊を、知床岬の尖端近くに、上陸させることになった。

ところが、冬の知床半島の、殊に北半分の海の状態は、絶悪というのが定評。とても私たちの海上の輸送を引きうけてくれる船長はなかった。岬へ船を近づけて上陸するなど、狂気の沙汰

だ、というのである。それを、羅臼の村当局から、たつて頼み込んでもらって、漸く「日の丸」の出動となった次第である。

岬から海岸沿いに約二十軒南下したところに、観音岩という鼻がある。そこを一つの境として、海の状態が、がらりと一変することは、この方面の漁師たちの間では、常識の一つとなっている。果して、この観音岩を過ぎて北上すると、海は一面に白く泡立って来た。そして、私たちの「日の丸」は、舳に波をかぶるほど、ピッチングの度を加える一方、横波をうけてローリングをやり始めた。これには、流石に、山では一騎当千の強者ぞろいも、すっかり参って、船倉に引き籠ってしまった。

やがて、赤岩という鼻にさしかかった。ここは、難破船長の人喰事件というので、有名なところである。今から十年ほど前、というから、大東亜戦たけなわの頃。ある年の十一月の始めに、この沖合で難破した船の船長某が、たどりついた海岸の無人の番屋で、同じく遭難した部下の船員たちの死体を、次々に喰べて、春まで生き延び、やっと救出されたという猟奇的な実話である。助かった当初は、彼も黙ってかくしていたが、残りの人骨をみかん箱に入れ、石のおもりをつけて海に沈めたのが、どうしたはずみか、ずっと南の方の海岸に漂着してから、騒ぎが大きくなった。果して、死んだ者だけを喰べたのだかどうか知れたものではない、といい出す者もあらわれ、当時は北海道中の話題を賑わしたという。如何にも北辺の地にふさわしい、妖気にみち

た物語である。

岬の方から押し寄せてくる波濤は、いよいよ高くなり、デッキに立つ船長の顔が、緊張の度を加えてくる。それもその筈、彼はついこの間の十月の末、台風の余波をくらって、この近くで船を破り、九死に一生を得たのだという。その頃から、吹雪の切れ目に、真白な雪の台地が、北の方へ続いているのが眺められた。知床岬へ続く台地である。

海の状態は、ますます悪化するばかり。これでは、岩壁の多い岬附近に船を近づけることは、思いもよらない、という船長の進言を容れ、岬から南方四軒のニカラウシの海岸へ、三名の突撃隊——岬パーティを上陸させた。彼等は、ここから海岸伝いに一旦、知床岬の尖端に到り、そこから改めて主稜線上を南下して、例の処女地帯を北から南へと踏破するわけだ。

残りの十一名（隊員九名と毎日新聞の二名の特派員）は、再び舳を返えして南下、観音岩の南方約四軒の合泊（あいどまり）の海岸へ上陸した。

#### 最東北端の部落

合泊は、羅臼から岬の方へ三十軒の地点にあり、一昨年あたりより、五家族の越冬者が、残留していた。その中の、子出藤さんの番屋の一部を、私たちの根拠に利用させてもらった。

この合泊では、十二月も中旬までは、僅かではあるが、船が出せる日もあり、かじか、たこな

どの漁も出来る。が、下旬に入ると海が荒れ始め、全く孤立した越冬生活に入る。そもそも、このようなところに、人が住みつくようになるまでには、それぞれ相当な理由があるに違いない。いずれも「知床開発」という開拓会社が募った数十家族の、入植者たちのうちで、その会社が幹部の不始末か何かで、お定りのコースを辿って潰れ、大半の入植者も逃げ出したあと、最後に踏み止ったのが、この五家族だったということである。

子出藤さん夫婦も、三年前、はじめてここへやって来た年の夏は、「拾い昆布」といって、海岸にこぼれ落ちた昆布を拾い集める、もともと惨めな仕事から着手して、今では、小さいながら焼玉エンジンのついた船を一隻もって、何とかやれるところまで、漕ぎつけた、と語っていた。

合泊の波打際近くに、「どぶ湯」と呼ばれる硫黄泉がある。湯槽の縁だけはセメントで囲ってあるが、底は海岸の丸い石を並べただけ。その上に、藁で小屋掛けが施してある。温泉というには、ちょっとわびし過ぎるが、来る日もくる日も、吹雪に明け暮れる荒涼たる土地で、冬を越す人達にとっては、こよない慰安の場所となっていた。私たちも、行動の合間には、これらの人と、「どぶ湯」に一緒にひたって、楽しい一時を過ごすことが出来た。

一月も下旬に近くなると、急にこのあたりの気温が、ぐっと目に見えて低くなる日が続くようになる。これは、オホーツク海の流水が、知床岬を廻って、根室海峡に近づいて来ている証拠なのだ。やがて、流水は合泊の前の海にも姿を現し、次第にその数を増して行き、それが核となっ

て、海の結氷が始まるのである。

その昔、指呼の間に望まれる千島の国後(くなしり)島の監獄部屋から逃げ出した人夫が、単身で凍結した海峡を歩いて渡って来たまではよかったが、ひどい凍傷をうけて、無惨にも両足を切断したという。

この話にも、言伝えにつきまものの、憎めない誇張と虚構があるようで、如何に流水が海峡いっぱいには押し寄せてくる厳冬のさなかでも、海峡の中央部を流れる潮流の部分だけは、最後まで残るのではないかと、この話であった。いずれにしても、ぎしぎしと不気味な音をたて、きしみあいなながら、北の方から次第に押し寄せてくる流水の壮观さは、ちょっと外には例えようのない見事な、そして懐愴な光景であろう。

#### 蛸、山へ登る

内地の新聞などから得た知識で、漠然と想像していると、知床半島のあたりなど、極度の緊迫状態にあるように思い込みがちだが、ソ連に最も近い部落の一つである、この合泊あたりが、平穩そのものであるのは、意外でもあり、若干ひょうしぬけの感がないでもなかった。

しかし、私たちの合泊で過す日が重なって行くにつれて、この平穩さの方が自然であり、かつ当然のことであるのに、次第に気づくようになった。ときたま、対岸のソ連領国後島から探照燈

の光茫が流れ、国籍不明のジェット機の爆音が響いても、ただそれだけのこと。この辺境で、つましく越冬している人々にとっては、それは一体、どれほどの意味をもつ出来事であろう。

合泊の人達と顔馴染になるにつれて、この人たちの生活が、私たちが勝手に想像しているほどには、決して淋しいものではないことが、靡ろげながら分って来た。文明社会の盲点、温泉印のネオンばかりがけばけばしく目立つ東京の夜空の下と、吹雪と波の音しか訪うもののないこの北辺のランプの下と、果して、どちらが、本当に荒涼たる光景であるといえようか。

事実、合泊の人口を一挙に倍にした私たちの不意の来訪は、単調な越冬者たちの生活に、大きな変化をもたらした様子だった。遠い、懐しい内地から来た、というだけで、私たちが大歓迎をうける理由は、多分充分だったのであろう。たまたま、「どぶ湯」の中で出合くと、彼等は遠慮ぶかげに、それでも熱心に、内地の話を私たちに引き出そうとした。こうして、しばらく私たちに、あまり平凡で一向に面白くもない話題でも、つきあって話を交わしていると、やがて帰ってから、必ず私たちのベース・ハウスを訪れてきて、何かと物を届けてくれるには、恐縮した。

あるときは、老婆が、どさりと二貫目余りもある、すのめ束を投げ入れて行ったこともあり、また二尺近くもあるかと思われる大きなかじかを届けてくれた隣人もあった。

中でも、一番私たちが驚かせ、かつ喜ばせた送り物は、籠に入った大きな蛸だった。引き出して、頭をもって下げてみたら、仲間の最も小兵なものと、同じ背丈があったのには、二度びっくりした。

前の海で、いま獲れたばかりだと、持って来てくれた漁師の人の説明であった。

この大蛸の処置には、実のところ、一寸困ったが、子出藤さんの案で、とにかく塩ゆでにすることになった。ストーブに大釜をかけ、ぐらぐらと湯をわかしながらゆでたが、あまり大きすぎた一度には入らず、何回にも分け、一時間余りかかって漸く仕上げる仕末には、一同思わず笑ってしまった。

ゆでた蛸は、一度にたべられる分だけを切り取って夕食に使い、残りは屋外に吊り下げて置いた。全く天然の冷蔵庫とでもいおうか、忽ちにしてびんびんに凍結してしまった。毎日、三日間たべても、まだ足の何本かが残り、それを凍らせたまま、食糧係が知床岳の第一キャンプまで担ぎ上げた。

そこには、飲料用のジュースを作るために、放出のレモン・パウダーが上っていて、それと、雪をとかした水とで、即席の酢をつくり、「酢だこ」としゃれ込んだのは、御愛嬌だった。流石に長い登山の経歴の中でも、冬山の前進キャンプで蛸を喰ったという経験は始めてだというので、しばらくは私たちの登山隊の話題は、蛸の話でもち切り、といった有様だった。

#### 処女地帯の踏破なる

私たちの計画は、この合泊のベース・ハウスから、更に二軒北上した、カモイウンベの川口附

近から山に入って、二つの前進キャンプを設けて、先ず未登の知床岳を陥し、さらに北上して、ポロモイ台地の先のところに、第三キャンプを設けて、岬から南下して行く三名の突撃隊を收容することにあった。

合泊に上陸した翌十七日には、早くも知床岳から東に出た尾根の中ほどの、小さなコルに第一キャンプが設けられ、次いで二日余り吹雪かれたが、二十日には主稜線直下に第二キャンプが出来て、快調な滑り出しを思わせた。

二十一日の晴れ間に、一隊は知床岳を横目でにらみながら、長駆してポロモイ台地の入口まで進出、第三キャンプのデポを作ると同時に、若しも、岬バーティが早く来た場合の目標にと、五本の赤い標旗を、五米間隔で横に並べて、再び第二キャンプまで戻って来た。

ところが、その後がいけなかった。二十二日から三日間は、テントの入口から顔を出したら、眼もあけて居られぬほどの猛吹雪。特に第二キャンプに対する風当りは物凄く、カマボコテントが、今にも吹き飛ばされるかと思われるばかりの荒れ方だった。気温も零下三十度をこえ、テントの中でもすら零下一〇度に下るといった、本格的な寒波の襲来となった。

三日目の二十五日、荒天が一息ついたところで、一隊は知床岳の冬期初登頂だけは、とにかく完成したが、第三キャンプを完全に占拠するには至らなかった。

この間に、岬近くに上陸した三名は、先ず荷物を主稜線の一角に運び上げてから岬へ往復し、

連日の吹雪がちな悪天候について、一路南下をつづけていた。そして、この二十五日には、僅かな晴れ間を利用して、問題視されていた、だだっ広いポロモイ台地を一気に横断して、その日の夕方には、知床岳の方へ続く稜線上に、点々と並ぶ赤旗を発見していた。しかも、数時間前につけられたと思われるスキーのシュプールまでが、南の方へ続いているのを見て、もう明日は間違いないと本隊に合流出来る、というので、その夜の野営は、殊の外、たのしかったという。

ところが、そうは問屋が卸さなかった。翌二十六日から、再び激しい吹雪になった。ここまで来たなら、もう大丈夫と、たかをくくって荒天について出発したが、しばらく行くと、風に吹き飛ばされたのか、標旗の列が杜絶えてしまい、視界のきかない尾根の上で、進むこともならず、再び赤旗のあるところまで引き返してテントを張り、凍って石のように固くなった寝袋の中へもぐり込んだ。燃料も殆んど無くなり、食糧も一日に乾パン三枚といった悲惨な状態に陥っていた。

そして、二十八日の正午まえ、ガスは濃い風が落ちたのを幸に、第二キャンプを発した一隊が、雪の中に青い点——岬バーティのナイロン・テントを発見して、劇的な握手が行われたわけだが、彼等が本隊の連中に向かって開口一番、呼んだのは「乾パンをくれ——」という言葉だった。

かくて、知床岬から知床岳に至る未踏の山稜は、最も条件の悪い厳冬期に、私たちの手に帰した。三十日の晦日には、全員そろって、合泊のベース・ハウスに集結し、思いがけない賑やかな正

月を、この北の果てで迎えることが出来たのである。

再び羅臼へ

一月四日、私たちは約二十日ぶりで、迎えに来てくれた小船で羅臼へ戻って来た。今度は「日の丸」よりも、一そうみずばらしい漁船で、船倉もなく、私たちは登山の重裝備を身につけ、吹雪のふきさらしの甲板のルックの上に腰を下ろして、三時間余りを、じっと耐えていた。このときの寒さは、山の上よりも酷く身にこたえるように思われた。

半島の山の中の私たちの生活に比べると、羅臼の村へ着いたときには、全く文明の真ただ中へ戻って来たような気がした。村の灰色の家並までが、何か輝きを帯びて眺められた。

私たちは、西井さんのお宅へ寄って、一寸一服したのち、直ちに第二次の計画である硫黄山と羅臼岳への登攀に向った。半島北部の言語に絶する悪天候に比べて、一月六日に、一日の快晴をものにして、計画はあっ気なく終了した。しかし、七日は猛烈な吹雪となった。

羅臼温泉を根拠とした隊は、距離が近いだけに、難なく引揚げて来たが、硫黄山の隊が吹雪に巻き込まれた。消息がたえ、気がかわれたが、幸い海岸線まで下りていて、とある番屋で一夜を明かし、翌日の午前中に、羅臼へ戻って来た。

その頃、羅臼はバス道路も積雪でふさがれ、完全に「陸の孤島」と化していた。唯一の交通

は、吹雪の晴れ間をみて船で標津と連絡する海路だけだが、流水が来る時期が旬日のうちに迫っているからには、この一縷の交通路の余命も、後いくばくも無さそうだった。

計画が完全な成功を取め、全員が無事もとの誠諦寺の離れの宿舎に集結を終えてみると、今まで気が張りつめていたせいも、それほどでもなかった望郷の想いが、期せずして私たち一同の心を占拠し始めた。

荒天がつづき、帰途の船がなかなか出でくれず、私たちは矢の如き帰心を抱いて、空しく日を送っていた。その間に、村長の田村さんが私たちのために豪華な祝宴を張って下さったり、西井さん一家あげての手厚いもてなしがあったにも拘らず、私たちはこれから帰る内地のことばかり考えていたようだ。この様をみて西井さんが、

「越冬婚の口を十ばかり見つけて来たから、みんな春まで婚入りして待つてはどうか。」と、冗談をいった。私たちは大笑いした。

一月八日の未明、ようやく待望の標津ゆきの便船が出た。多分、これが最後の船だろう、との話だった。まだ薄暗い埠頭まで、西井さんが見送って下さった。私たちは舷側に並んでいた。船が動き出したとき、誰からとなく「螢の光」の合唱が起った。西井さんが帽子をふっている。私たちも、手袋をぬいで、力の限り振った。やがて、船は港外に出、トンビをきた西井さんの姿も見えなくなったが、合唱は、それからまだしばらくの間、続いていた。

## 北の誘惑

——知床の風物をさぐる——

## 北海道の中の外地

はじめて津軽海峡を渡った旅行者は、道内の人々が、しばしば口にする「内地」という言葉に、そぞろ郷愁をかきたてられる。

日航が数時間で、私たちを札幌まで、運んでくれるようになって、この気持には変りがない。

ところが、この北の都、札幌から、札幌局が御自慢の急行「まりも」にのって十時間。釧路で釧網線にのりかえ、さらに標茶(しべち)で、もう一つの、一層地方色ゆたかなローカル線に乗りついで、文字通りの終着駅、根室標津(ねむろしべつ)に辿りつくのだが、これまた釧路から、先ず一日は見ておかねばならぬ行程。そこからさらに一日二往復のバスにゆられて、根室海峡に沿ってゆくこと四時間にして、ようやく到着するのが、陸の孤島——知床半島の南の門戸、羅臼(らうす)港だ。品質の良いのを売り物にしている、目梨(めなし)昆布が作り上げた町である。

札幌からでさえ、これだけ、手間をかけねば、行きつくことの出来ない知床半島一帯の地方を、私が「北海道の中の外地」と呼んだからとて、決して奇をてらったことには、ならないと思う。

羅臼の戸数は、僅か九百六十余り、それも開拓地特有のバラック建の軒並みだが、この方面では釧路につぐ良港をもち、背後に雪をいただいで聳える羅臼岳の容姿と相俟って、いかにも清潔な感じのする所である。

ここから、知床半島の尖端、知床岬に到るまでの間は、半島の脊稜をなす、羅臼岳、硫黄山、知床岳を連ねた山地が海岸まで迫り、多くは百米以上もある断崖となって、切れ落ちていく。海岸線を進む道も、あるにはあるが、交通は主として、焼玉エンジンの小さな漁船が利用されている。それも、客室のない完全なオープン(?)の代物であることが大部分だ。

## ハンの木と大砲

ハンの木があるのは、道内で何も知床に限ったことではない。が、この土地の人たちによると、知床方面のハンの木は、他の地方のものより一層、節くれだち、ぐねぐね曲りくねった格好をしているという。

そこで、面白い新造語が出来ている。

「あいつは、ハンの木だ。」

一風かわった人物だ、変り者だ、という意味である。また、知床地方は、海流の関係で、非常に天候が不安定で、ことに冬期にはそれが著しく、晴れていたと思うと、たちまち鉛色の雲が覆いかぶさってきて、ちらちらと雪が落ちてくる、といった日がつづくのだが、これを「ハンの木天気」といったりするあんばい。

しばしば伝えられる開拓地の人々の気質として、一攫千金の機会を鶴の目鷹の目でねらっている荒々しさ、殺伐さ、といった感じは、少なくとも知床半島に住む人々の間には、さまで顕著には感ぜられない。むしろ淡白で、しかも底ぬけに親切な人に出合うことが、珍らしくないのである。その上、内地から来た、ということになると、それだけで彼等には一層の懐かしみをもって、受取られるようだ。

しかし、この地方の人々の、話題の豊富なことは、一驚に値いする。夏場の昆布や漁業だけで、一年分の稼ぎを上げ、年の半ば以上を占める冬期を、ストーブのそばで暮すのであってみれば、それも当然のことであろう。

例えば、これはある年の冬、私たちが一月近く厄介になった合泊（あいどまり、羅臼の北方三十キロにある）のNさんの話である。

——若い頃、そうだ、もう二十年も前のことになるが、二十噸余りの小船にのって、オホーツ

ク海へ、流氷にのって南下してくるトツカリ（海豹）の密猟に行ったときのことだ。氷山のあいだを縫うようにして進んでいくと、やあ、いるわいるわ、まるで氷の上にゴマ塩をふりかけたようなトツカリの大群だ。ごさんなれ、とばかり連発銃を向け、ろくに照準も定めず、滅多うちのうちまくって、夕方までに百數十頭を止めた。翌日、また獲ろうと思って銃を構えると、どうしたことか、指が引金にかからない。これは不思議なこともあるものと、手袋を取ってみると、昨日酷使しすぎたせいか、人差指が平素の五倍ほどに腫れ上っていた……。

ざっと、このような調子である。これに類した大風呂敷話を、知床地方では「大砲」といっている。何も大砲をぶっ放すのは、Nさんだけではない。羅臼のあるお寺の住職の言葉をかりれば、「軒並みに、大砲の連続で、北辺の護り（？）は鉄壁の如し」であるとのこと。全くもって、罪のない話である。

#### ソ連のみえる岩風呂

知床半島の山々は、いづれも火山である。現在、活動しているのは硫黄山の一部に過ぎないが、ところどころ温泉が湧き出でて、旅行者の旅情をなぐさめてくれる。

温泉といっても、内地や北海道の「湯の町」のことを思い浮べたら大変な見当違い。ただ、岩の間から湯が湧き出ている、といったところが大部分だ。

中でも、最も野趣が横溢している感が深いのは、羅臼から岬に向って、海岸沿いに二十四軒の位置にある瀬石(せせき)温泉だ。摂氏七五度の塩類泉で、波打際の岩をくり抜いて湯槽が作られている。勿論、露天風呂だ。附近には、トッカリムイの嶮が海に迫って奇岩絶壁が聳え立ち、その向うの水平線には、はるかソ連領の千島の島影がみえる。

冬期は雪のために、入浴はおぼつかないが、五月から十月にかけては、少数ながら湯治客もある。七月の昆布の最盛期の夕方には、東北あたりから出稼ぎにきた若い娘たちが、一日の昆布取りの重労働に疲れた肢体を、この浴槽の中から異国のみえる湯に浸して、故郷の歌など、合唱している光景もみられるという。

ここから、さらに二軒ほど北に上った合泊の「どぶ湯」も、その名はいとも不粹だが、海岸に小石を敷きつめた湯槽を作り、わらとトタンで簡単な小屋掛けが出来ていて、これは冬でも入浴が可能だ。吹雪の音、波の音のシンフォニーの伴奏で、冬の一日、この湯槽の中で、越冬している数家族の人たちと混浴しながら、男たちの「大砲」を聞いている楽しさは、また格別である。これらの中で、まだ一番、温泉という私たちの観念に近いのは、羅臼温泉であろう。港に流れ込む羅臼川に沿って行くこと四軒、羅臼岳の麓にある。湯量がきわめて豊富で、湯の温度も八十度、という秀れたものだ。野天風呂はいうまでもないが、一部に簡単な浴室もあり、この地方の温泉の中では、入浴者の数は断然多い。附近には、羅臼一帯に電源を供給している発電所があり、また春の桜、秋の楓の名所ということにもなっている。

### ほろびゆく野性

知床(しれとこ)というのは、アイヌ語のシリ・エトックのなまったもので、「島または陸のきわまる果」という意味だという。いかにも、この地方の人文地理学的な条件を、表現しえて妙である。

この日本の最東北端、知床半島の魅力は、何といっても、千古の荒々しさを秘めた、大自然の風物がかもし出す「野性のおい」にある。断崖絶壁の裾を洗う波濤の白さ、二千万石といわれる針葉樹の大原始林は二月から三月かけてオホーツク海から押寄せてくる流水の壮观、それらは、私たちの胸に、限らない北辺の旅への誘惑を、かき立てずにはおかない。

しかるに最近では、この知床半島が、北海道開発計画の中で一つの焦点になっていて、既に岬から数軒南下したニカリウス附近では、バルブ会社の伐採が始められている。また、この春には、総合学術調査団が派遣される、とも伝えられている。

行き詰った戦後の日本の一つの突破口としての、この国土開発計画については、何ら反対を表明する理由は見当らない。しかしながら、現在のわが国の中で、最も人煙まれない地域であるこの半島一帯から、次第に野性のおいが消されていくのは、淋しいことである。

知床の海には、二尺近くもある大きなカジカがいる。井上靖氏の「明日来る人」で一般の人たちにも名前を知られるようになった、実に容貌怪異な魚だ。それでいて、一名ナベコワシという別名があるほど、カジカ鍋にすると美味なのである。私は今でも、このカジカの味こそは、知床半島の魅力の象徴だと思う。たとえ近い将来、知床が人臭いところになろうとも、私は心の中に生き続けている、この半島の野性をたずねて、機会があったら、もう一度この地方を訪れてみたいと念願している。

## カルカッタ印象記

### 1

一日中、まるで蒸風呂に入っているようだといえば、やや当っているかも知れない。既に盛りを過ぎた暑さだと、在留の邦人たちの話だが、なかなかどうして大変なものだ。日本内地とは、暑さの基準が全然違うのだから、どうしようもない。

始めは、民間外交の使節よろしく、上衣をつけ、ネクタイも行儀よくきちんと結んで歩いたものだ。が、そんな虚勢は二日とは続かなかつた。まず上衣を脱ぎ、襟もとをひろげ、はてはネパールに入ってから旅行用に持参した半ズボン姿まで現れる始末。それでさえ、二時間も通関などの煩わしい手続を行っていると、もう我慢が出来なくなって、一度、冷房のあるホテルに引揚げて休息せねばならない有様である。東京の夏が暑い、京都のむし暑さがたまらない、なととかこつのは、全く贅沢千万な話だ、と妙に力んでみるものの、いやはや暑いことには変りがない。

暑さがこたえるのは、住みなれたインド人とても同じらしく、カルカッタのいわば銀座通り、チャールズ・リントンやニュー・マーケットの界限も、正午から午後四時頃にかけては、至って閑散で

ある。旅行者とみれば、うるさくつきまとはなれない、名物の乞食の姿さえまばらである。それが、日が西に傾きはじめると、いつとはなしに人波がふえて、盛り場らしい状況が、よみがえってくる。

道ゆく人々の服装は、職業や階級によって異なるので、一概には言えないが、いわゆる中産階級の連中は、クレープの長いシャツを、ぞろりと着流して、下半身はズボンがわりにドウティと呼ぶ紗のような布をまきつけて歩いている。これが、俗に番頭階級といっている、日本でいえば、さしづめ丸ノ内のサラリーマンたちの服装なのだ。

もちろん、一部の富裕階級を除けば、これらの連中は、最も羨望される階級なのであり、もつと下の一般の大衆はといえば、シャツ一枚、サルマターつきの、半裸体に近い姿である。もつとも、このような人たちは、表通りへはめつたに出て来ない。

盛り場を歩いて気づくことは、女の姿がたえて稀なことだ。サリーをまとった妙齡の婦人など殆んどといってよいほど見当らない。これは、ちょっととした失望だった。銀座や河原町通りなどの、日本の都市の目抜通りが、着かざった女性の群に支配されているのに比べて、ここで街を歩いているのは男ばかり。これでは、暑さも一層つらうというものだ。

## 2

カルカッタは、西のボンベイとともに、印度の東の門戸だ。そして、インドの他の都会に比べ

て、あらゆる点で、最も近代化された街だといわれている。実際、カルカッタの繁華街、チョリンギーの繁華は、尾張町四丁目あたりと比べて遜色はない。ただ、ここで興味深いのは、このような表通りに、原始的な露天商人の姿がみられることだ。頭に籠をのせ、鈴をならしながら瓜などを売り歩く男。けばけばしい彩色をほどこした竹細工の手籠を歩道の脇に並べて、身動きもせずに座っている老婆など。これらの露天商人と目抜通りの近代建築との対比が、この国の資本主義経済の浅さを物語っているようで、いかにも象徴的である。

煩雑な出入国の手続きの事務のあい間に、ほんの僅かな暇をみつめて、ニュー・マーケットへ、足りない身廻り品を買いたしに行ったりするとき、正面の車だまりのところ、年寄りの金魚売りがあった。閣下のようなヒゲに、そりを打たせて、無造作に巻きつけたターバンが、まるで鉢巻のように愛嬌たっぷりだ。細長いマーメイドの空ビンのようなガラス容器に、出目金とも鮎ともつかない黒い魚を入れ、それを四つばかり縄で結び合わせて手に下げている。客の前に来て、頭の高さに持ち上げて振ってみせるのだ。乗って行ったタクシーの窓へ寄ってきたのにカメラを向けると、二、三步、夕陽の中へ後ずさりして、金魚を売るとき仕草のように、ピンを振ってみせた。

## 3

カルカッタのある西ベンガル地方は、インド中でも、最も人口の稠密なところとして知られて

いる。独立後はバキスタンから合流したものを加え、更に膨脹の一路を辿っている。カルカッタ市自体も、最近では近郊を合せて五百万人を越える有様だという。

この人口の九十パーセント近くが、ヒンズー教徒である、といえ、仏教国日本の人たちは、ちょっとげんな顔をするだろう。インドは釈尊の生国である筈、従って仏教徒が多いだろう、と考えるわけだが、それがとんでもない見当違いだ。現在、インドでは仏教が殆んど滅亡してしまっているのである。

カルカッタ市内でも、目につく塔は、すべてヒンズー教のバゴタばかり、仏様をまつたお寺は、絶えて見られない。なぜ、このようなことになったのか。その理由はよく分らない。一説によると、この国に昔から強く根を下ろしているカスティズム(階級制度の思想)に対して、仏教のいわゆる「みほとけの廣大無辺な慈悲」といった平等の思想が、支配階級のために不都合であり、彼等は寺院を壊し、経文を焼くなど、あらゆる手段を講じて仏教を圧迫して行った。これに対して、仏教徒らは、古来おだやかな性格の持主であり、またその宗旨からも剣をとって戦うことを敢えてしなかった。次第に滅されて行ったのだ、といわれている。

少し余談になるが、お釈迦様の本当の出生地は、実はインドではなくて、その国境に近いネパール王国内の、タライと呼ばれる平原の中にあり、ノータンワからボカラに至る遠征隊のコースから少し横に入ったところである。

ところで、このヒンズー教だが、これがまた誰に聞いても、さっぱり要領を得ない、掴みどころのない宗教である。よくは分らないが、とにかく戒律のきびしい宗教であることは確かだ。その中で有名な掟は、牛を大切にすることだ。その肉は絶対に食べないし、まして屠殺するなどは論外で、使役することすら許されない。お蔭で、インドのホテルは、世界中で牛肉がまずいことで定評をとっている。私たちの泊っているホテル・スペンシスでも、ときどきビフテキなどが出るのだが、その索莫たる味は、正に靴の皮をたべたチャプリンの思いも、かくやとばかり、いやはや、大したものであった。

牛が、このように神格化されているのに反して、水牛となると、全くこの恩恵に浴していないのは皮肉である。理由は知らない。ただカルカッタの目抜き通りを、真黒な水牛が、汗とヨダレをたらしながら、息づかいも荒く荷車を引いて行く。そのすぐ傍の歩道の日蔭では、牛が悠々と寝そべっている光景に、再三頭をかしげさせられたことは確かだ。もっとも、かかる図は、何もこの国の動物の世界だけの現象ではなく、どこかの国でも、これに似た出来事を、耳にしたことがあるように思われるではないか。

## 4

カルカッタの名所の一つに、世界的に有名な植物園がある。中心街からは、ガンヂス河の支流にかかった、東洋一と誇称する巨大な釣り橋をわたり、ハウラ・ステーションの横を通って、車

で約二十分の行程である。

インドは、その特殊な地理的条件により、植物の種類が非常に多いといわれている。中でもガングジス河の流域は、文字通り植物の豊庫だという。そして、そこに繁茂する植物をもれなく集めたのが、このカルカッタ植物園なのだ。

カルカッタに滞在中、二度まで訪れる機会に恵れたものの、その分野の専門家でない悲しさに、折角、宝の山に入りながら、みすみす素手で帰る恨みをかこったのだが、ある日、案内をかって出してくれたネパール皇太子付の秘書のダルシャン氏も、この点では全く私と互格であった。

園内にタクシーを乗り入れて、ぐるりと一巡したのだが、それでも二十分は悠にかかったほどの大規模なものだ。これだけは見逃してはいけな、と停車を命じたダルシャン氏の後から下りてみると、こんもりした一つの森のようなものがあった。その周囲は、三百米ほどもあつたらうか。これが、驚いたことに、一本の木だという。気根というのであるうか、枝という枝から無数に垂れ下った根のようなものがあり、それがまるで幹のようにみえる。ざっとみたところ、七、八百本はかたいところだろう。あとで、隊の若い植物学者にたざしたら、バーニヤン樹ツゲといつて、いちぢくの一樹だとのことだった。

そこからしばらく行くと、見事なヤシの並木道があった。すくすくと快く伸びたヤシの幹が、次から次へと現れてくる壮観は、全く常夏の国の植物園ならではの感が深かった。

## 5

この国の教育の程度は、日本の文盲のパーセンテージと、インドの字の読める人間の割合とが、ほぼ同じだといわれることから、大体察せられるというもの。ネール首相の「新らしきインド」になつてからも、この教育の問題は頭痛の種で、今のところ、まだ著しい進歩の跡はみられないに至っていないことだ。

ところが、少数ではあるが現在既にある学校は、実に立派な建物が多いのである。工学にかけてはインドで一、二という定評のあるベンガル工業大学も、その一つだ。

ダルシャン氏の竹馬の友が、ネパール政府派遣の留学生として在学しているというので、植物園の帰り道に、車を廻して訪ねてみた。いづこも同じ門衛氏に来意を告げて構内に入ると、先ずその広大なのに一驚した。ゆったりと取った敷地の中に、講堂や研究室は勿論のこと、教授の宿舍や学生の寮までが含まれており、それらがいづれも堂々たる鉄筋コンクリートで出来ている。

建物の周囲は、緑の芝生で埋められており、丁度敷地の中央にあたるところに、古めかしい時計台があつて、その前が相当な広さの池になつていた。大学というよりも、一寸した公園といった感じである。

あまりの広さに、ダルシャン氏の友人は、どこにいるのか見当がつかない。三人目につかまえた眼鏡の学生が偶然知つていて、その案内で寄宿舎へ行った。これまた鉄筋の立派な建造物だ

が、中へ一歩足をふみ入れてみると、これはまた一変して、いずこも同じ学生部屋の風景である。万年床のような寝台の上に、ねそべって本を読んでいるもの。落書が一ぱい刻みつけられた古色蒼然たる机に向って、冥想にふけっているもの。日本の学生寄宿舎そのままである。

ダルシャン氏の友人は、日本人そっくりの顔つきの、見るからに温和そうな学生で、私にも丁寧な挨拶をした。久しぶりで、しかも思いがけぬ出会いに、積る話も多いのだろう、二人の話は延々として尽きそうにもない。ときどきダルシャン氏は私の方をみて、ちらっと「もう少しですよ。」というような笑顔をむけるのだが、一向に腰を上げる気配もない。私は、つとめて、何気ない風をよそおいながら、ぎらぎらした光線の溢れている窓の外をぼんやり眺めていた。

## 6

カルカッタの街の中央に、広い公園がある。無名戦士の塔をはじめ、いろいろな記念物があり、芝生の緑がともきれいだ。領事館のKさんにいわせると、ロンドンのハイド・パークそっくりだという。いずれも英国統治時代の遺物だが、この公園があることによって、カルカッタの中心部の街の印象が、随分よくなっていることは確かだ。

芝生の中には十指に余る蹴球場があり、この暑さにもかかわらず、午後になると必ずいく組かの試合が行われているのは、正に驚異に値する。サッカーは冬のスポーツだ、という考えでいる私たちの頭では、到底、想像もつかないことだ。丁度、全インド選手権試合をやって居り、地元

の西ベンガル・チームが優勝したというので、球技場の横では、焚火をたいて大騒ぎの熱狂ぶりだった。

この公園の中で、チョリンギー通りに少し寄ったところに、大きな広場があり、そこでは、ときどき組織労働者の大会が行われていた。記念塔の基部にプラカードを並べ、拡声機でリーダーらしいものが、上ずった声で一席ぶっているが、それに比べて集まった連中は、案外おとなしく並んでいる。余り闘争といった激しさが感ぜられないのである。

デモ隊が街を行進しているのにも数回出くわしたが、「インディア・シンダバード（インド万才）」と叫んで列を組んで歩いているだけ。ジグザグ行進をやって交通を妨害したり、インターを歌ったりしているのを一度も聞かなかったのは、最近の日本のデモを見つけている目には、むしろ不思議にさえ映った。

インドの人口は三億七千万人といわれる。全く大変な数だ。この国の現在の経済力では、これだけの人間の生活を保証することは、容易なことではないようだ。しかも、一日一ルピー（七五円）以内で生活している連中が珍らしくない、との話には、流石に暗い気持ちに陥って行くのを、どうしようもなかった。

## 7

インダス河がインドの父であるとすれば、ガンヂス河は母である、豊沃なベンガル平野を貫流

するこの河には、印度の歴史が流れている。

見た目には、まるで泥の流れである。水の青さというものは、全くみられない。これは何もガンジス河に限ったことではないのである。このあたりの川は、すべてそうなのだ。とうとうと流れる濁水をつめてみると、山紫水明という言葉が、しみじみと心によみがえってくる。

カルカッタは、このガンチス河の巨大なデルタ地帯に発達した街だ。従って、港というものはなく、外国航路の汽船をはじめ、船はすべて河岸に横づけにされるのである。日の丸を揚げた日本船の姿もみえる。遠征隊が待ちあぐんでいる銀光丸も、ここへ着くことになっている。川口附近の流れがきつく、遡行する船は、いずれも十三ノット位の速力を出さねばならない。

また河の中には、上下の二層に分れた水脈があって、一旦この河の中に落ち込んだものは、永久に浮び上って来ないそうである。先だっても五名のフランス人の旅行者が、土地の人たちの制止も聞かず、泳いで横断しようとして、三人までが行方不明となり、その死体も揚げて来ないという事件があったという。

この河の流れそのものは、お世辞にも美しいとはいえないが、川辺の夕景色には、いいしれぬ哀愁がある。河岸の舗装道路の上を、夕日を背にして、荷揚げ人夫の一团が、抑揚の少ないインドの歌を口ずさみながら帰ってくる。裸足で、その上体には破れたシャツのようなものを一枚身につけているだけ。全く貧困の見本のような人たちだ。しかし、このみすばらしい姿も、一日の

仕事を終えた喜びだろうか、うきうきとして楽しそうだ。足どりもかるやかに通り過ぎていく。恐らく一ルビーそこそこの僅かな報酬を、黒い手の中に握りしめていることだろう。

河面の残照が拭い去られたように消えていくと、やがてカルカッタの街にも夜が訪れてくる。

## アンナプルナへの旅

コメットで出発

世界の屋根といわれるヒマラヤの高峰の、七割近くを領有している国。そして、これらの地理的条件を楯に、二十世紀の半ば（一九五〇年）まで、奇蹟的な鎖国を続けてきた国。世界の潮流の、遙か後方に取り残された、いわば中世的なネパール王国への私たちの旅が、近代文明の粹ともいうべき、コメット機によって始められたことは、確かに大きな皮肉であった。

出発と決った日（一九五三年八月三十日）は、台風の接近のために、東京は朝から風雨が、夜に入るといよいよその激しさを加え、羽田では、タラップを踏む私たちの頬に、横なぐりに吹きつける雨滴が、痛い位だった。この天候で、果して飛べるのかしら、という幼稚な私たちの心配をよそに、コメット機は、ジェット・タービンの金属的な爆音を響かせて、定刻通り滑走を始めた。

十数分の後、ふと窓の外をみると、降るような星空である。その下を、私たちをのせたコメット機は、一万二千米という高度をとって、一路南下していた。

沖繩、マニラ、バンコック、ラングーンとそれぞれほんの三十分そこそこ、給油のため着陸し

ただで、翌日の正午過ぎ（というと、僅か十二時間余りの後）、私たちはカルカッタのダムダム飛行場で、蒸風呂のような熱気の中に抛り出されていた。

内地の汽車旅行と、殆んど変らない短時間で飛んで来たので、距離に対する感覚が、全く狂ってしまい、当座はカルカッタの目抜き通り、チョウリングイーで、黒い皮膚の群衆の中を歩いているときでさえも、一向に外国へ来たという感じがしないのには、少なからず困惑させられた。

「これでも、ずっと凌ぎやすくなったのですよ。」日本総領事館の人々は、慰め顔に言ってくれたが、カルカッタの暑さには、ほとほと閉口した。これからみれば、日本の夏に暑いと愚痴をこぼすことなど、もっての外だと思われた。何しろ、暑さの規準が全く違うのだから、お話にならないのである。この酷暑の中で、私たちは毎日、不案内なカルカッタの街を駆け廻った。パスポートの査証、入国手続などは、一般の旅行者と同じだが、私たちヒマラヤ遠征隊の場合は、三ト近くの荷物を持ち込まねばならず、先づ、これに対する無税輸入の許可をとるために、税関に日参せねばならなかった。流石にカルカッタは印度の東の門戸であるだけに、五階建の堂々たるビルディングが多いが、その内部はごみごみしている上に、通風が極めて悪い。私たちの荷物に関する書類のファイルを追つかけて、もの、二時間も、この税関の階段を上ったり下ったりしている、シャツまでぐっしょり汗が滲み出てくる。

それだけに、二週間後のある夕方、カルカッタの川向うにあるハロワ駅で、印度有数の特急で

あるバンジャップ・マイルのコンバートメントにおさまったときは、ただもうわけもなく嬉しかった。生れて始めて乗る「一等車」というので、一同それぞれ期待に胸をふくらませて乗り込んだが、中には京都の私の医院の診察台と同じ固さのベッドが四つあるだけ。それに、手洗とシャワーが一緒になった小さな部屋がついている。窓には鉄格子がはまっており、入口のドアは、まるで金庫のような頑丈さだ。その上、御丁寧に、二段構えのかんぬきが掛る仕組みになっている。何のことはない、まるで護送列車だ。ただ、天井に五つ、一列に並んだ古風な大型の扇風機だけが僅かに一等車らしい豪華さ(?)を止めていた。

衰微した印度仏教の中心地、ヴェナレス市と、鉄道局と聯隊があるだけだというゴラクブル市とで乗り換えて、国境の町ノータンワに向って北上する支線に入ると、沿線にはもはや電気がない。どの駅でも、駅長が石油ランプのあかりを頼りに、発車の合図の鐘を叩いていた。

### 「中世」に入る

ノータンワから約一時間、まるで泥の海のような悪路を、ジープに揺られながら行くと、路のわきの田圃の中に、白い標識が立っていた。これが、印度ネパール間の国境線だった。黙っておれば、それとは気づかず過ぎてしまふような、無造作な国境越えであった。それもその筈、全く人為的な国境線で、地理上では、ずっと北の方にみえる、私たちがこれから越えてゆかねばな

らない二千米ほどの山岳地帯の下までは、一樣にタライと呼ばれる印度平原の続きなのだ。

さらに二時間ほど走り続けて、プトワール・バザールというところについた。バザールというのは、日本語で書けば、さしづめ「市場」といったところ。トタン屋根の多い、みるからにごみごみした感じの家並だった。そして、ここがいよいよ、文明の終点であった。

ここから先の中世的な旅行にそなえて、私たちは荷物の再梱包と整理のために、まる二日の滞在の後、七十人の人夫に荷を負わせて、根拠地のポカラへ向って、ヒマラヤへの旅の第一歩を踏み出した。

聞きしにまさる悪い道だった。私たちのもっていた道路というものに対する概念は、半日も歩かないうちに、ものの見事に打ち砕かれてしまった。この状態は、ポカラまでの八日間の旅、そして、さらにヒマラヤの山の下に至るまで、果しなく続いたわけだ。

私たちの歩いている道が、いきなり個人の庭の中を通り抜けたり、小川の岸でぶつり杜絶えたりするのはまだしも、水田の中を、じゃぶじゃぶと歩かされるのには、いささか度胆を抜かれた。よくみると、稲株の間隔が、その部分だけ少し広くなっている。なるほど、道に違いないのだ。

ネパール王国の中へ進入していくに従って、私たちの宿泊地を集ってくる病人の数も、次第に増加して行った。どのようにして伝わっていくのだろう、日本のドクター・サーブ(お医者)の且

那)が来ているという噂が、忽ち沿道の村々に、ひろがったらしかった。一日の行程を終えて、その日の泊場につくと、そこには必ず二十数人の患者が、私の到着を待っている始末だった。

つれてくる人夫の中からも、毎日きまって十人余りの病人が出た。それらの大部分は、慢性のマラリヤ患者だった。一日の行進が終り、荷を下ろして一息つくくと、急に悪寒が襲ってくる訴えた。始めは仮病ではないか、と疑ったが、シャツ一枚でいても、なお暑い亜熱帯の谷間の夕方、唇の色を変えてがたがた震えているのは、発熱しているのに違いなかった。パウドリン(合成マラリヤ薬)を一錠やめて休ませた。次の朝、どうしたろうか、と注意して見ていると、冴えない顔つきながらも、いつもの通りの荷を負って、私の前を通り過ぎて行った。賃金への執着からであろう、病気で仕事を放棄して帰る人夫は減多になかった。

土地の病人は、もう何年も前に、手遅れになった病軀を運んでくるものが多かった。角膜の外傷が化膿して完全に失明したもの。整復をせずに何年も放置してあった骨折。それに癩病と結核。一度やそこらの診察と治療とでは、どうにもならないものばかりだった。

また一口に、土地の患者を診る、といっても、言葉の通じない問診というものは、まことに厄介千万なものである。病気の診断というものは、苦痛を訴える患者と、それを治療する医者との間に、一対一の微妙な気持の交流することが必要だ。これがなくては、先ずもって、病気の本体を掴むことは難かしい。ところが、ネパール人の通訳を間にたてての診療では、文字通り靴を隔

てて足をかくようなもどかしさである。

#### ラマニを診察

少し話は前後するが、医療のことが出たついでに、笑えない滑稽な話を一つ。

チベット国境近くの、マルシャンディ河畔の一部落で、うら若いラマニを診たときのことである。ラマニというのは、ラマ教の尼僧であって、その資格は未婚のけがれない女性に限られている。

そのラマニは、年の頃は十六、七といったところだったろうか。そして、困ったことには、ネパール語を知らず、チベット語だけしか話せなかった。私たちのネパール人の通訳は、チベット語は不得手なのだ。そこで、チベット系のシェルバ(高地人夫)を一人加えて、私と患者との間に、二人の介添えが入って、世にも珍妙な診療が始まったのである。

先ず私が、

「どこが痛いか。」

と英語で尋ねるとする。通訳はそれを、ネパール語でシェルバに伝える。シェルバは、さらにチベット語に直して、ラマニに聞く。尼僧といっても、うら若い女性のことだ。はにかんでいて、なかなか明瞭な返事が得られない。やっと、二こと三こと、シェルバに答える。それが同じ

経路を辿って、通訳から英語で私の所へ戻ってくる。この間に、五分近くも経っているのだから、全く嫌になる。そして、あげくの果てに曰く、

「今朝から何もたべておりません。」

ざっと、このような調子である。「問」が抜ける、とは正にこのことをいうのであろう。

ところが、言葉の喰い違いなど、まだしもよい方である。というのは、若い女性の診察に当たっては、「生理」の状態を聞き出さねばならないことは医者の方識だが、(このラマニのように殊に腹部に痛みを訴えているときは尙さらだ)ことここに至ると、問診は最初の英語の段階で行き詰ってしまうのである。

「この女性の生理状態はどうか。」

「生理とは何の生理か。」

「月々の生理のことだ。」

「ドクター、真に申訳ないが、よく分らない。もう少し詳しく説明してもらえないだろうか。」

通訳も、まだ二十二歳のネパール青年だ。感が悪いのを責めるわけにはゆかないのである。

### 瘤取り物語

印度国境に近いプトワール・バザールから歩き出して八日目に、私たちはボカラについた。ネ

パール第二の都会だというものの、人口は周辺を合せて漸く一万三千足らず、といった可愛らしい町だ。そこで、人夫をかえたり旅装を整えたりして、いよいよ目指すアンナプルナ第二峰と四峰の南面に源を發するマディ・コーラの溪谷に沿って、待望のヒマラヤへの進撃を開始したのだ。

山が近づくに従って、ヒマラヤ山系の谷間の部落での、特徴のある風土病として知られている甲状腺腫をもった住民の姿が目立つようになってきた。首の前に、大きな瘤をぶら下げているのである。これは、沃度の不足から起るもので、海から遠いこれらの地方では、沃度に富む海藻などたべられないのは勿論のこと、さらにまた塩も岩塩のみを用いる関係上、どうしても体に微量ながら絶対に必要な沃度を撰取することが出来ない。その結果、甲状腺の機能障害が起って、あの大きな瘤が出来るのである。

私が始めて、これを見たのは、プトワールから歩き出してから六日目、ブーブレという村の外れで、例の大きな奴を前にぶら下げて歩いてくる老婆に会ったときだった。私たちと行きちがつたところを見ると、奥地から出て来たのに違いなかった。私が写真をとろうとカメラを向けると、ここにこ笑いながらレンズの前で手を振って、巧みに拒んで通り過ぎて行った。

写真といえは、一般にネパールの女たちは、写真に撮されるのを、極端に嫌がるように見受けられた。恥かしい、というのではなく、日本にも昔あったように、写されると生命が短くなる、

とかいった迷信を恐れているようだった。この老婆にしても、むしろ、その方を嫌がったのかも知れなかった。

ボカラを出てから三日目に、マディ・コーラに沿ったシクリスという部落についた。海拔二千米余りの山の斜面に、二百戸ほどの草葺の家が、階段状に軒を並べており、これがこの谷で人の住む最後の村だった。モンスーンの名残りの雨雲がたちこめ、夢のような眺めだった。

生れて初めて、そして恐らく二度とは見る事が出来ないであらう、ジャパニー(日本人)というものを見物するために、私たちが宿泊していた家の前には、連日五、六十人もの群衆が詰めかけて、一日中あきもせずうず高く積まれた私たちの梱包箱の山を眺めていた。

その中に、日本人そっくりの顔立ちの、一人の可愛い少女がいた。このあたり一帯に住むグルンという種族は、一般に私たちとよく似た顔をしてしたが、この少女は特にそうだった。しかしながら、哀れにも林檎ほどの大きさの瘤をもっていた。この甲状腺が、若い間から大きく肥大した者は、白痴になることが多いように見受けられた。少女も、ときどきあらぬ方角をむいて、ぶつぶつ何か、つぶやいている様子だった。私が、「瘤取り物語」を聯想して、しげしげと眺めていると、母親らしい女が来て、少女をつき飛ばすようにして家の中へ押し込んでしまった。狂った我が子を、異邦人の目にさらしたくない親心だったのだろう。

私が、ほっと何か救われたような気持になつて顔をあげると、モンスーンの雲の切れ間の、首

筋が痛くなるほどの、すぎまじい高さに、アンナブルナの前衛峰の一つ、ラムジュン ヒマールの白銀の峰頭がのぞいていた。

## 嵐の中の遠征隊

すさまじいジェット気流

何とも形容の出来ない、不気味な空の色である。青黒いコバルト色とでもいったら、いくぶん当っていいよか。

私は第一キャンプの前で、梱包用の木箱に腰を下ろしたまま、この空に突きささったように聳えているアンナプルナ第三峰（七五七六米）の頂稜と相對していた。その直下から始まって、三千米を一気に垂直に落下する壮大な岩壁、その真中にある巨大な皺曲のあとを示す層理のうねりも、いまは私の眼には映っていなかった。

頂稜のあたりで、すると旗を掲げるように、白い雪煙が上り始めた。それは次第に高くなり、やがて前後左右にも新らしいのが立ちはじめ、頂稜全体が白い帆をあげたように眺められた。この雪煙の一番高くまで上昇しているものは、山の高さから推して九〇〇〇米から一〇〇〇〇米にも及んでいよう。間もなく、第三峰のすぐ東につらなる私たちの登っていた第四峰（七五二五米）さらには、その峰つづきの第二峰（七九三九米）までが、一せいに雪煙をあげ始めた。その有様は、あたかもここから見える限りの、ヒマラヤの峰々が、沸き返っているように思われ

た。

これが、ヒマラヤの冬の特徴だといわれているジェット気流の襲来だった。このために、私たちは四日前、七二〇〇米の第五キャンプを、第四峰の頂上を指呼の間に望む主稜線上に張りながら、夜半にテントを吹き破られ、空しく下山するの止むなきに立ち至ったものだ。

ジェット気流とは、七〇〇〇米から上のあたりにあらわれる激しい大気の流れで、西から東へと絶えず吹いているものだ。この流れの帯が、いくつか知られており、日本の北海道の上空にもあらわれることが指摘されているが、ヒマラヤの上空にも一本あることが最近はっきりして来ている。これが、夏期の間は少し北方に移動して、ヒマラヤ山系はその主流から外れることになるが、十月頃から再び南下して、冬中ずっとヒマラヤの上に居すわり続けるという。したがって、秋のヒマラヤ登山の時期は、九月末のモンスーン明けから、冬のジェット気流が、未だその勢いを増さない間の、ほんの十日余りの短い間だ、ということが出来る。その好機は、私たちが南面で不運な地形に出会って登高を阻まれ、五五〇〇米のナムン・バンジャンの峠越えを強行して、十日間で急拠北面へ廻って来た十月二十日には、既に過ぎ去っていたのだ……。

昨年（一九五二年）の秋、エヴェレスト登頂に絶対の自信をもって立ち向ったスイス隊が、サウス・コルで釘づけにされ、一時はそのキャンプを占拠していた隊員の安否さえ、絶望視されるといった窮地に追い込まれたのも、このジェット気流の仕業だった。私たちの遠征隊も、これと全

く同じ運命を辿ることになってしまった。

闘志は火ともえて

そういえば、十月二十日私たちが北面のベース・キャンプを、セバティチュ・コーラの四五〇米あたり、丁度かんばの林が、しやくなげの群生に移行するあたりに設けたとき、既にこのジェット気流の南下を示す雪煙が、七〇〇米以上の稜線には見られていたのだった。私たちは、それをうすうす知っていた。知っていたとて、どうすることが出来たろうか。

私たちの闘志は、荷物の延着、南面の放棄、苦しい峠ごえ、などといった相つぐ、不運な障害にもかかわらず、みじんも衰えをみせてはいなかった。それでなくとも、わざわざ念願のヒマラヤまでやって来て、風が吹いていると、むざむざ引き下るわけには行かないではないか。

ベース・キャンプでは、荷物の整理のため一日滞在しただけ。次の日から、アンナプルナへの挑戦が始められたのだ。

第一キャンプは、堆石丘に囲まれた、小さな窪地に設けられた。高度は五〇〇〇米。結局ここが前進ベース・キャンプとなった。ルートは、さらに南方へ一〇〇〇米余り、モレーンをかぶった氷河を横ぎって行くと、第四峰から西に出た主稜が、前衛峰と私たちが呼んだ雪のドームのところで、北に張り出した肋稜の下につく。取付きは、五〇〇米もの絶壁になっていて、それを向

て右へまいて、氷雪崩に削られたルンゼの片側の、わずかな弱点をぬって突破する。このルートは、一九五〇年の春に、英国の有名な登山家で、エヴェレストをはじめとしてヒマラヤにその足跡の至らないところがないティルマン氏の一行が開拓したものだ。次いで、一九五二年の日本のマナスル踏査隊も、少しだが偵察をしている。

第二キャンプは、この壁の上の支稜に出て二〇〇米も登ったところ、鷲の巢のような僅かばかりの岩棚の上に設けられた。高度は五八〇〇米だった。

第二キャンプから第三キャンプへ向う途中に、どうしても巻けない約三〇〇米の垂直の氷壁があり、これにアイス・ハーケン十五本を打ち込んで乗切の二日かかった。

第三キャンプは、この氷壁をこえて、さらに一ピッチほど登った六二〇〇米の地点に、さらに十一月一日にはバラ・サーブ（隊長）とF・Wの二人のサーブ（隊員）と三人のシェルバが、前衛峰をこえた次のコルへ第四キャンプをたてた。そして、翌二日には、第五キャンプを七二〇〇米まで進めたのだった。

これまでは、直接には風の当たらない山の側面を登っていたせいも、案外にすらすと事が運んでいった。私たちの闘志もまた、まさに当るべからざるものがあった。そして、栄冠は、もう目の前の、手の届きそうなところにある、と思われていた。

## 風と共に夢さりぬ

いよいよ、その日はやって来た。十一月三日、日本では文化の日だ。私たちの隊は、このアンナブルナ第四峰の北面の五〇〇〇米から七二〇〇米の間に、完全な展開をして、頂上攻撃隊の成果を見守っていた。

ところが、その日に、私たちが最も懸念していたものが、やって来たのだ。ヒマラヤの冬の嵐、ジェット気流の襲来である。これが第一波であったのでは勿論ない。恐らく、私たちが主稜へ顔を出したときが——十月の間の吹き始めには、ときどきジェット気流が息をつく日が数日あるといわれている——その僅かな好機の、最後のものではあったのだろう。

三日は強風のため終日動きがとれず、第五キャンプの一行は、テントの中で休んでいた。しかし、夜に入ると、風はいよいよ吹き募るばかり。平均風速は、これまでの経験から推して五〇米は越えていたろう。

夜半の午前一時頃だった。終に破局の前ぶれが訪れたのは——。テントの一角が破れ始めたのだ。それから、どれだけ時間がたつたろうか。私たちの第五キャンプは、ジュラルミンの支柱に、あたかも古い聯隊旗のように裂けた布の一片だけを残して、あとかたもなく吹き飛んでしまった。テントとともに、私たちの夢も消え去ってしまったのだ。

それからの、一行の下降での苦闘は、全く目を蔽わしめるような悲惨なものだった。強風のために身が吹き飛ばされ、氷結した急斜面を滑り落ち、あわや三〇〇〇米下の氷河まで真っさかさま、と思った瞬間、登山綱のおかけで止まったことも、再参ではなかった。このような悪条件下では、とにかく無事に危地を脱出したことだけで、賞讃に値いしよう。シェルパの一人は、両手の指にひどい凍傷をうけた。隊員のFも耳たぶと右手の中指の先を少しやられ、バラ・サーブの足の裏も、ごく軽い程度のもだったが、その被害を免れなかった。

ジェット気流は、伝説ではなかった。私たちの敗北は明らかであった。四日の夜、第三キャンプでは、下って来たバラ・サーブとR、それに私をまじえて、いろいろと討論が交された。ここで、一旦ベース・キャンプまで下って再参を計るかどうか、という根本問題についてだった。それを決定する鍵は、いうまでもなく、いま私たちの周囲を荒れくるっているジェット気流である。これが、また例え数日にせよ、息をつくようなことが、果してあるかどうか。結論は、悲観的であった。もうヒマラヤには完全な冬が来ており、峰々の頂稜を洗う強風は、恐らく春まで止むことがないであろう。

バラ・サーブは最後の断を下した。それは、私たちの考えと全く同じものだった。

「撤収する——」

私たちの戦いは終わったのである。嵐の中を遠征隊は、アンナブルナ第四峰の頂に背を向けて下

り始めた。

アンナブルナよさらば

第三峰の雪煙は、依然として立ち上っている。その姿は、何匹もの白い龍が、狂喜乱舞しているように見える。ジェット気流のあふりであるかどうか、この第一キャンプの窪地にも、ときおりさっと、強い風が吹きつけてくる。砂塵が舞い上る。その中から、三々伍々、みすぼらしい格好をしたチベット人の群が、谷の方から上って来た。今日の下山の荷を担ぐ人夫たちだ。

正午ごろ、テントはすっかり取り払れた。正確に何時であったか、たしかめる気にもならないので分らない。それだけの気力も残っていなかったのだ。サーダー(シエルバの頭)が、こまごまと人夫たちに荷物の指示を与えている。私たちには、まだ一向に第一キャンプから下るのだという実感がない。さりとて、ここに残って、どうしようという意志もないのだ。二十日前に、占拠して以来、この第一キャンプこそは、私たちの生活のすべてだったのだ。日本から地球をぐるりと廻った、この遙かなヒマラヤの山中に来て、私たちを支えてくれたのは、事実上のベースとなった、この堆石丘の間のキャンプだった。それも、まさに姿を消そうとしている。

人夫たちが、長い列を作って、谷の方へ消えていく。あとに残ったのはサーブたちと数人のシエルバだけだ。テントのあった場所だけが、僅かに白く見えている。いよいよお別れだ。また、

いつか訪れることがあるだろうか。それは誰にも分らない。私は帽子をかぶり直し、私たちのアンナブルナ第四峰を、もう一度ふり仰いだ。

山は私たちが、始めてここに立って眺めたときと同じ姿で、一層はげしく雪煙をふき上げながら聳えているのだった。

## 中世の都にて

その名もヒマラヤ・ホテル

アンナブルナ遠征の帰途、私たちがネパール王国の首都カトマンズに立ち寄ったのは、十一月二十四日の夕方。山麓の町ボカラから、着陸すると乗客が席に坐ったまま後尾の方へずると流れて行くといった双発の古いダグラス機で、大ヒマラヤ山系に沿って約四十分余りの飛行の後であった。皇太子秘書のダルシャン君、一週間ばかり前に日本から帰国したばかりだという顔馴染のラナ君、それに私たちの登山隊の通訳兼連絡将校の重任を果してくれたディリー君の兄弟など、思いがけぬ大勢の友人が飛行場まで出迎えてくれた。

ダルシャン君が手配してくれた二台のジープに、荷物と人間とを積み込むと、ここ二カ月以上も、一滴の雨も降らないというドライ・シーズン（乾燥期）の道を、もうもうたる砂塵を巻き起して、私たちはカトマンズの市街に向って走り出した。流石にヒマラヤの山々の七割近くを領有している国の首府だけに、北方にはずらりと七〇〇米から八〇〇米に及ぶ高山が、長城のように並んでいる。おりしも、斜陽が、一つ一つの峰頭を、薔薇色に刻み上げ、月並みな表現だが、壮麗そのものの景観である。つい二週間前まで、私たちも、あの世界の屋根の一角に住んでいた

のだ。が、今はもう遠い昔の出来事のような気がしているのも不思議だ。ネパール・ヴァレーと呼ばれる、このあたり一帯の盆地の高度は、海拔一五〇〇米足らず、気候も日本の十月半ば位にしか感ぜられない。冬に雪が降るのは五年に一度あるかなし、例年は真冬でもせいぜい霜をみる程度だと、私の横に座ったディリー君の説明であった。

十万という人口からも容易に推察されるように、日本の地方都市、殊に県庁のある町を考えるとただけば、このカトマンズの市街のスケールに当らずとも遠くはない。ただ何と云っても、一國の首府だから、王宮、中央官庁、軍司令部、といった建物が、その上に加えられることになるわけだ。私たちのジープは、これらの近代風な建築物の立ち並んだ一角を抜け、煉瓦で作った門を一つくぐって、ジュッタ・ロードと呼ばれる目抜通りの、とある古びた建物の前で止った。入口のドアの上に、英語で何か書いてある。「ヒマラヤ・ホテル」これが、私たちの十日間の宿となったのだ。

名前だけは、如何にも堂々たる立派なものであった。が、中に入って見て驚いた。案内された部屋は、三階のコーナー（角）だから、このホテルでは第一級のものに違いなかった。しかし、内容は、いふなれば東京の三流以下の安宿と同じであった。中学生が手工で作ったような机と棚、それに日本の病院の隔離病棟の寝台のような固さのベットがあるだけだ。それでも、約七十日間も、文化から隔絶されたヒマラヤの山中を歩いて来た私たちには、このようなお粗末な部屋に入

っただけでも、久しぶりで都会へ帰って来た気がしたのだから、全く他愛のない話であった。

### ネバールの久米仙

カトマンズを訪れた私たちの主たる目的は、登山隊に並々ならぬ好意を示し協力を借しまなかつたネパール政府に対する儀礼的な訪問にあった。そのスケジュールが決るまでの数日間、私たちはディリー君などに案内されて、市内の見物に出かけた。

カトマンズの町の中だけは、分解して担ぎ込まれた自動車、約六百台ある。非常な善勞と費用をかけて持ち込んだものだけに、大変な時代物も、大きな顔をして走っている。私たちの常備になったタクシーも、この例にもれなかった。いつもホテルの前に駐車していた四二年型のボンティヤックだったが、車の命数が尽きかけているのか、はたまた道が悪いのか、恐らくその両方が原因してであろう、年式が割に新らしいくせに、走ると今にも解体しそうな音をたてた。このガタ・タクシーに乗っての見物も、却って中世の都にふさわしいもの思えたのである。

カトマンズには、実にお寺が多い。その数は二千とも、三千ともいう。人口の割からすれば、京都も遙かに及ばないだろう。もっとも、これらの寺の大部分は、日本のように住職が一人づついるわけではなく、バゴタ(塔)だけが立っている。その種類も、ヒンズー教、仏教、ラマ教その他、種々雑多であった。

京見物が、「お寺巡り」になるように、古都カトマンズでの私たちも、古びた三重の塔の並んだ寺院ばかりを見せられて、次第にうんざりして来た。ところが、ふと私たちは面白いことを見出した。この塔の屋根を支えている柱に、きわめて精巧な彫刻がしてある。千手観音によく似た像で、ヒンズー教徒の崇拜する「シバの神」だった。ところが、この像の足の下に、奇妙な群像があった。よくみると、さまざまの男女の姿態が、実にリアルな手法で刻まれている。いうまでもなく、交歓の図である。私たちの視線の行くえを察したディリー君が、あれは「雷除け」の迷信によるものだと説明した。どうして、これが雷よけになるのか。

「日本流の考えでは、却って雷が落ちて来はしないかな。」

私は「久米の仙人」の故事を思い出して、ディリー君にいった。もとより、私の冗談の意味が分る筈もなく、この若いネバールの青年は、不思議そうに私の顔を見返していた。

### スコッチを逸す

カトマンズの町には、ところどころ芝生の美しい広場がある。ヒンズーの神様である牛が、ここでも放牧されていて、これらの広場は牧場をも兼ねていた。ホテルから、五分も歩いたところにも、大きなのがあって、そこではカーキー色の制服を着た兵隊が、毎日教練を行っていた。「ネパールにも軍隊があるのか。」

そのような質問は、大いなる認識不足というものだ。れっきとしたネパール国軍がある。総兵力は公称一万二千人である。迫撃砲と重機までは持っていた。これをネパール政府は、「戦力なき自衛のための軍隊」といつているかどうか、私は遺憾ながら聞きもらなかった。独りで苦笑しながら、兵隊が突撃の練習をしているのを眺めていると、傍から、

「うるさいから、写真はとらないで下さい。」

と、いつもながら、よく気をつくデリー君の忠告に、私は思わず噴き出すところだった。

ついでながら、もう随分と昔の話になるが、第一次大戦で、その勇名を世界にとどろかせたグルカ兵は、実はネパール人そのものなのだ。グルカ族といって精悍な種族のだが、彼等は日本の徳川でいえば士族にあたる位置を現在のネパールの国内で占めている。今の支配階級の人々も、多くはこの種族の出である。カトマンズの西方約六十軒のところ、ヒマール・チェリーがブリガンダキーの溪谷をへだてて真正面にみえるという山の斜面にグルカという名の町がある。それが彼等の故郷だ。第一次大戦のグルカ兵団というのは、このグルカの若者たちが、当時イギリスの統治下の印度軍の傭兵となって戦ったもので、ネパール国軍とは別のものだ。

このネパール国軍に、インドから三十余名の「軍事使節団」が派遣されて来ていた。そして、私たちは一タ、彼等に招かれて、水交社さながらの彼等のメスを訪れることになった。この会合のきっかけとなったのは、カトマンズ駐在のインド大使の招宴で、使節団の将校たちに会ったこ

とからだだった。私たちが歩いてきた大ヒマラヤ山系の北面の、チベット国境附近の情報を聞き出すというのが、彼等のねらいであることが、私には容易に分った。

チベット国境附近の近況を私たちが喋ったとて、日本の利害と全く関係がないことは勿論である。また私たちの知っているようなことに大して軍事的な意義があるとも思われず、したがってネパールにとっては言うまでもなく、チベットにとってさえも一向に不利益をもたらすなどとは、考えられなかった。それならば、間違いなく振舞まわれるであろうスコッチ・ウイスキーの逸品を送る手はないとばかり、例のがたがたのタクシーに乗って出かけて行った。

使節団のメスは、もとのある皇族の邸宅だったか。大理石造りの素晴らしい建物であった。ジエネラル(將軍)と呼ばれる六十近い老将が、私たちを大広間の中央に招き入れて、集っていた将校の全部を、一人一人、名をあげて紹介した。それが終ると、すぐに酒になった。

「ブラック・アンド・ホワイト」「ジョニー・ウォーカー」「ヘイグ・アンド・ヘイグ」などなど、若い軍人たちが多いだけに、全く浴びるような飲み方だ。私たちの予想は、見事に適中したかに見えた。

ところが、である。職務に忠実な将校たちは、矢つぎ早やに質問を向けてくる。

「アンナプルナの北面へ到る道の状態はどうか。」

「橋は、どの程度に架っているか。」

「その道は、馬が通れるか。」

「ボカラから北面まで何日かかるか。」

「ドクターは、そこでどのような疾病に遭遇されたか。」

「携行した医療品の種類と数量や如何に。」

ざっと、このような調子である。そして、これらの質問は、通訳の任に当たっている私に集中してくる仕末。私は折角の逸品をなみなみとついでグラスを手にもったまま、右往左往、まるで応接に暇のない有様だった。お蔭で、最初の一杯すら、あけることが出来ないうちに、一時間余り会話を終ってしまった。

「私たちが出来ることでしたら、何なりとお力になりますから、遠慮なく申し出て下さい。」

老將軍の、いかにも外交になれた、もの柔かな言葉に送られて、タクシーに乗り込みながら、私はとんだ策戦のそ誤に、思わず苦笑をもらしたのだった。

#### 皇太子殿下に会う

カトマンズでの私たちの儀礼的な訪問のスケジュールの中で、最も重要なものの一つに、皇太子スリマヘドラ・ビルビクラム殿下にお目にかかることがあった。国王は夏以来、体の様子がすぐれず、現在スイスへ療養に行っておられて留守なので、皇太子は摂政の宮として、大変ご多忙

な様子だったが、ある日の夕方、二十分余りの時間を割いて下さった。いうまでもなく、秘書のダルシャン君の取りなしによるものだ。

都合でカルカッタへ一足先に戻って行った仲間を送った後、この訪問のために単身、ヒマラヤ・ホテルに残っていた私は、ディリー君と、いつものがたがたのボンティアックに乗って出かけて行った。

「ロイヤル・パレス(王宮)へ——。」

ディリー君が、おごそかな声で行先を告げると、見るからに貧相な風態の運転手は、「恐れ入りやした」とでもいうように、ビョこりと頭を私に下げ、ぐっとアクセルを踏み込んだ。車は砂塵をまき上げてスピードを増した。

王宮の入口には、鉄格子の簡単な門があり、既に連絡があったとみえて、衛兵はすぐそれを開けて、私の車を中へ入れた。宮殿はフランス風の白亜の三階建てで、前に噴水のある広大な庭があった。

がたがたと、勇ましい騒音をひびかせながら、私たちの大きな宮殿の庭を横ぎっていくと、その向うに、同じような、やや小型の宮殿が見えて来た。それが東宮御所だった。方角が、王宮の東側になっているという偶然の一致も面白かった。受付けのような、小さな建物の前で下りると、ダルシャン君が私たちを中へ招き入れた。

私もディリー君も、流石に少し緊張して固くなっていたようだった。ヴェランダ風の控えの間で、三十分ほど待ってから、ダルシャン君に導かれて入ったのは、思ったより簡素な西洋風の応接間だった。パイプ式の椅子と机のセット。壁ぎわの書棚に、二、三の石膏像が並べてある。殿下は、ソファに腰をかけて待っていられた。神経質そうな感じの、すらりとした体格の持主である。非常に正確な、そして美しい英語を話されるのには、ちよつと、びっくりした。

握手がすむと、殿下は私に椅子をすすめられた。すると、一步下って立っていたディリー君が、直立不動の姿勢で、とうとうと、何か喋り始めた。むろんネパール語である。ときどき交る英語から察するに、どうやら遠征の経過を、報告しているらしかった。十分位、まるで立板に水を流すような雄弁であった。殿下はときどき、「ふむ、ふむ」と頷いて聞いておられた。

ディリー君の報告が終ると、殿下は首を横に振られた。「よろしい。」という意味だ。するとディリー君は、新兵のように、くるりと廻れ右をするや、いきなり部屋から出ていってしまった。

正直なところ、これには私もいささか面喰った。ディリー君は会見中、介添役として、ずっとついていてくれるものと、ひとり決めていた。いかさま、完全な不意打だった。殿下は、おもむろに私の方に向き直られて、

「ネパール国内の旅行は、如何でしたか。」  
と、ゆっくりとした調子で問われた。

「イエス・ユア・ハイネス(はい、殿下。——)。」

私は、突差に、ちよつと口ごもった。

「すばらしいネパールの大自然の中の旅は、私たちが、かねて想像していた以上に、楽しいものでございました。」

それから殿下は、日本について、いろいろと私に尋ねられた。その中で、多分、「ライフ」などでお読みになったのであろう、広島や長崎はどうなっているか、復興ははかどっているか、と大層心配そうな面持ちで聞かれた。ようやく落着きを取り戻した私は、あまり政治的なことに触れないよう気をくばりながら、出来るだけ詳しくお答えをした。

二十分ほど瞬く間にたった。会話が一段落ついたところで、頃合いをみはからって、私は暇を告げた。殿下は戸口まで、私を見送って下さった。

すっかり暮れかかった庭に出ると、池のほとりのベンチに、ディリー君とダルシャン君とが向い合って坐っていた。私が出て来たのを見ると、立って来て、

「どうだった。」

「殿下と何の話をしたか。」

と、口々に聞いた。

まだ勤務の残っているダルシャン君をのこして、私とディリー君は、同じ受付から外に出た。

そして、待たしてあったタクシーに乗って、王宮の門を出た。  
西の空には、日本でみるのと同じ夕映えが、鮮かな朱色を流していた。大切な訪問を無事すませ、ほっとした私の心には、今まで忘れていた郷愁の念が、どっと一時に湧き出て来るのを覚えた。黄昏の、異国の都大路を、私の乗る四二年のポンティアックが、がたがたと、中世と近代のまじりあった騒音をたてて走っていった。

## 雪男談義

このところ少し下火になったようだが、エヴェレストが登頂されてから、相当長い間、雪男の人氣は上昇の一途を辿っていた。ヒマラヤといえば、世界の屋根と考えるのは、まだ少しでも登山に関心のある人たちだけで、どうやら多くの世間一般の人々には、雪男の聯想の方が、優先的であったようだ。

私たちが、待望のヒマラヤ登高を終え、さまざまな山の幸に胸をふくらませて日本へ帰って来たときにも、案の定、このことに至るところでつき当った。

「ヒマラヤで雪男を見ましたか。」

聞く方では、もとより本気ではない。軽い冗談のつもりだろうが、この質問にはかなり当惑させられたものだ。不幸にして私たちは、この問いに対する答えを、実のところ持ち合せていなかった。というのは、私たちは百日近くのヒマラヤ山中の旅の間、ついぞ雪男には出会わなかったからである。

雪男というものが、世界にはじめてデビューしたのは、初期のエヴェレスト登山隊員が、連れて行ったシェルバたちの話として紹介したが、その始まりであろう。

毛むくじやの巨人で、ヒマラヤの山頂に住んでおり、夜なよな登山隊のテントにあらわれて人間をさらっていく。力が非常に強く、二本の足で氷河の上を飛ぶように走る。さらに滑稽なのは、雪男は踵の方を先にして、つまり後向きに走ると信ぜられていることだ。

シェルバたちは、雪男を自分たちの言葉でエティーと呼んでいる。私も、山への行き帰りの、ネパール国内での徒歩旅行中のつれづれに、連れていたシェルバたちにエティーの話を聞きただしてみた。彼等が拙い英語を、というより知っている僅かばかりの単語をつぎ合せて、懸命に説明してくれたことも、これまで文献などで私が持っていた知識に、あまり加えるところはなかった。また、彼等の中で、誰一人として、この目でエティーをみると、主張したものもなかった。エピソードは、いずれも彼等の祖父、あるいは祖父あたりからの語り伝えであるようだった。エティーの姿をみたものは必ず死ぬ、といわれているとも聞いた。が、結局シェルバたちから直接聞いた話も、一向に要領を得ないものに終り、その中から、私がまさかとは思いなながらも、心のどこかで、ひそかに期待していた、雪男が実在するか否か、という問題を解く手掛りは、何一つ得られなかったのである。

\*\*

雪男にまつわる話は、ヒマラヤ遠征の歴史と、同じ古さをもっている。随分と長い間、ヒマラ

ヤ遠征隊の報告書の中には、必ずといってよいほど、このエティーの挿話が記されてきた。それも、シェルバたちの雪男に対するはげしい恐怖について述べているのが大部分だ。そして、文明人である遠征隊員たちは、誰も彼等の狂信を、まじめに考えるようなことはしなかったのである。

ところが、一九五二年の秋、ネパール側からのエヴェレスへ登るルートを偵察に入った英国隊が、カトマンズへの帰りがけの駄賃に、ガウリサンカル山塊の未踏査地帯をさぐったとき、メンルン氷河の雪の上で、世にも怪奇な足跡を発見した。それが、たしかに実存していたことは、持ち帰られた写真からも明白になった。それによると、深く喰い込んだ拇指のあとが目立つ大きな足型で、前後の径は、ビッケルの頭が、すっぽり入ってしまう位の大きさである。その足跡が、千米以上も延々と続いており、隊員たちが辿って行ったところ、氷河のモレーン(堆石)のところで消えて、そのあとは残念ながら見失ってしまったという。

この報告をもたらしたのが、その年の英国隊を率いていた、世界中のヒマラヤ登山家きってのヴェテランであるエリック・シブトン氏その人であったので、ちょっとした岳界の話題になった。今まで、エティーなど、ヒマラヤ山麓に住む原始的な連中の伝説の中にだけ存在する動物として、問題にもしていなかった山岳家たちも、改めて首をかしげ始めた。シェルバたちの語るよ

うな姿の雪男がいるかどうかは怪しいとしても、シブトン氏の写真にあらわれた足跡をつけた、

相当に大きな、そして恐らく二本足の動物が、その氷河を横ぎって行ったことだけは疑う余地がないからだった。

雪の上の足跡は、日がたつて、その中の雪が一部とけると、実際よりは可成り大きくなることは、よく知られているところ。その点を割引きして考えても、シフトン氏が発見したメンルン氷河の足跡の主は、決して小型動物ではない、という事は確かのように思われたのである。

ジャーナリズムが、これを見逃す筈はなく、その翌年の春、二百六十万の発行部数を呼号するイギリスの大衆新聞ディリー・メール、——この新聞はチャーチル内閣の記事よりも、映画俳優のゴシップを大きな見出しで組むような編集ぶりだと聞くが、これが「雪男遠征隊」というのをエヴェレスト附近へ派遣したのである。日本では読売新聞が、特約をとり、記事を紹介した。それによるとエヴェレストの根拠地として、有名になったタンボチェの僧院で、早くも雪男の頭皮を発見した、と写真入りで煽りたてたが、そのあとが龍頭蛇尾で振わず、ついに雪男生獲りは失敗に帰したようであった。

\*  
\*

このついで、というのは当然ぬかも知れないが、私たちがヒマラヤで体験した出来事の中で雪男に僅かながら関係のありそうな話題を一、二拾ってみたいと思う。

アンナプルナ南面、マデイ・コーラの奥のベース・キャンプから、山のこの側が手がつかないと分つて、一挙に五千米をこえるナムン・パンジャンを越えて転進を試みた時のことだ。峠に雪が来ていて、低地の人夫が使えないために、私たちはシェルバだけをつれ、自らも荷を運ぶために往復するといった無理を重ねながら進んでいった。こうなると、サーブ（旦那）もシェルバも、実質的には何ら差が認められない。いつの間にか、誰いとうとなくダージリン・シェルバに対して、「京都シェルバ」という言葉が、隊員の間で流行していた。

ようやくナムン・パンジャンをこえた北斜面の五千米の地点にテントを張って、五日目の夜を過ぎたときのことだ。高度の影響から寝苦しく、夜半にふと目を覚すと、すぐ近くの尾根のあたりから、奇妙な唸り声が聞えてきた。それは「ぎゃーっぎゃーっ」とも「ぎよっぎよっ」とも聞こえ、私は未だかつて耳にしたことのない不気味な声であった。私は突差に、「エティーではないか」と思ったが、連日の過労にすっかり参っていた体には、起き上って、テントから首を出し、声の主をうかがうだけの力もなく、そのまま、うとうととしていた。その怪奇な唸声は、それから随分長く続いていくように覚えている。

これが如何なる動物の鳴声であったかは、今もって詳かでない。その翌日も、まだ地獄のような行進が続く、夜半の怪声など問題にしているような呑気な状態ではなかった。三日後にマルシヤンディ河のほとりにまで下りて、一同ほっと一息ついたときに、私は始めてそのことを話題に

のせたが、他には誰も聞いたというものがなかった。たとえ聞いたとしても、あの苦しみのさなかであってみれば、恐らく記憶に残らないことも考えられたのである。

今一つの話は、もっと他愛のないものだ。強引な転進作戦も成功し、いよいよ北面からアンナブルナ第四峰を目指して次々とキャンプを進め、問題の氷崖の上に第三キャンプも出来て、次の第四キャンプへと向ったときのことだった。出発して、ものの百米も行くかいかいな所で、シエルバの一人が、突如として悲壮な叫び声をあげるのが聞えた。

「エティー、サーブ、エティー（旦那、雪男だく）」

さてはシプトン氏のような足跡かと、隊員がかけつけてみると、なるほど雪の斜面に点々と円い跡が谷底の方へつづいている。が、一つ一つ些細に観察すると、間隔こそ大体一定にはみえるが、指のあとなども認められないし、第一どうも足跡といった感じが薄い。どうやらこれは、雪塊がバウンドしながら落下して行ったときに、偶然に出来た跡だという結論になったのである。あとにも先にも、私たちに雪男を連想させた出来事というのは、この二つのエピソードだけであつた。

\*  
\*  
\*

果してヒマラヤには、雪男がいるのだろうか。ヒマラヤを歩いて来たと称する私たちの、この

問題に対する答えも、世間の人たちの考えと、どうやら五十歩百歩のようだ。

ただ私は生物学に関係をもつ者の一人として、次のようなことだけはいえると思う。即ち、如何に雪男が原始的な動物であっても、雪と氷と、僅かばかりの岩屑だけしかないヒマラヤの山頂付近で、生棲することが出来るとは考えられない。地衣類すらも姿を消す高度である。そこでエティーが生きて行くためには、身体を構成する蛋白質を、空中の窒素から合成する外に途はない。このようなことは、現在の自然科学の常識から余りにもかけ離れた話である。絶対にあり得ないことなのだ。

となると、いま一步を譲って、ヒマラヤに雪男がいると仮定した場合、どうみても、その生棲地は、高くて雪線を遠く上回る筈はないことになる。ヒマラヤは、よく熱帯の山だといわれるが、ジャングルの中へ巨大な氷河が流れ込んでいて、といった風景すらところどころで見受けられる。またそうでない場所でもナキウサギなどの小動物は、五千米附近まで出没する。これらを蛋白源として摂取出来るとすれば、このあたりで雪男が生命を保って行くことは、不可能とはいえない。

ここで、またシプトン氏の足跡に戻るが、あれだけの大きさの足跡をつけることが出来るものを、いま現存している動物の中から捜すとすると、二本足を歩けるという制約も加えて、考えられるものは狼と熊の二者しかないといわれる。最近では、どうやらヒマラヤ熊が、雪男の生体だ

との見解を述べる向きも少なくないようだ。一応、もっともらしい説明である。

しかし、これにはまだ疑問がないではない。かつて私が遠征隊の装備をある子供のための博覧会に出品するために、丁度それが行われていた名古屋の東山動物園を訪れたときのことである。その園長さんと雑談を交している中に話がたまたま雪男に及んだ。そのときの園長さんの意見では、シブトン氏の写真の足跡は、あまりにも整然と並んでいる。とても熊などの動物には、二本足で立ってあのような、しっかりした歩き方は出来ない。もっとよたよたした足跡になる筈である。あれの足跡は、一つのはっきりした意志と目的とをもった動物がつけたものであるような印象をうけた、というのである。この話を私は非常に興味ぶかく聞いたのを思い出す。帰ってから、件の写真をもう一度よく見ると、私はこの動物学者の意見が、なかなか鋭くポイントをついているのに、改めて感心したのである。

\*  
\*\*

先年アフリカの海で、シーラカンスという三億年前の魚が捕まったという例があり、「生きた化石」というので大評判になった。

一度あることは二度ある、という。人類の祖先が氷河期に既に生棲していたことが考古学的に立証されているというから、それより先の人類そもその当初からまるまる算えても五十万年そ

こそであるとするれば、ヒマラヤの奥に氷河時代からの生き残りがいないとは、誰も断言出来ないだろう。「三億年前の魚」に比べたら、人類の歴史など、まだつい昨日のような出来事だといえるからだ。

しかし、そのような議論は、もうどうでもよいのである。私たちがヒマラヤの雪男のことを頭にえがくとき、何もその存在について、生物学的な必然性のことなど、誰も問題にしようとは思っていないのだ。

とにかく、相手は毛むくじャの巨大なのだ。それが、馬鹿の大足を、のしっのしっど運びながら、原始の姿をとどめている氷河谷を歩いていく。思うだに愉快な光景ではないか。

二十世紀の後半は、自ら発見した第三の火、原子力のために、逆に人間が奉仕をしいられる、といった恐ろしい予感がみなぎっている今日このごろのことだ。その私たちの心の中に、氷河時代への思慕が僅かでも潜在しているとすれば、これは全く楽しいことではないか。

エティーの存在を信じて疑わないヒマラヤ山麓の人々と、雪男などと頭から一笑に附してしまふ文明たちと、果してどちらが倅せであるか。まだ神の裁きは下されてはいないのである。

## ヒラリー会見失敗記

五月のある日曜の、よく晴れた午後のことであった。久しぶりで暇が出来、四条河原町へ映画でもみようと、ぶらりと出かけたが、あまり気をひかれる作品もかかっていないままに、家へ帰ってきた。四時を少し廻った頃であった。

「先生、つい三十分ほどまえ、こんなお方さんが……。」

と戸口のところでお隣の奥さんから、留居中に訪問客があったと、一枚の名刺を渡された。みると東京にいる岳友のT君だ。私は「しまった。」と思わずつぶやいた。つい一週間前、彼から結婚挨拶の葉書が来ていた。その彼が京都へ現れたのだから、話の筋書きは説明するまでもない。

T君と私との交友は、高校時代からのことだから、もうかれこれ十五年余りになる。私はその当時、高校から大学へ入ったばかりの夏山で、後輩たちの合宿のコーチ役を買って出て一緒に穂高へ入ったことだった。ちょっとした事故のために負傷したT君を、私と二人の現役とで背負子に乗せ、涸沢から上高地まで下ろした。その途中の、屏風岩の下丸木橋で彼を負ったまま渡ったときの恐ろしかった感じは、いままって私の記憶に新しい。ところが、傷が少し痛む外

は至って元気な彼は、

「天孫降臨であるぞ——。」

と、私が胆を冷しているのも知らぬげに、背負子の上で、はしやいでいたものだ。

それ以来、大学も同じ京都へ来て、山行だけでなく、私たちが当時創刊した山岳雑誌の手伝いをしてもらったり、さらに彼が入社した新聞社へ、その雑誌を移すのに主役を演じたり、そして遂にはヒマラヤの氷雪の中まで、行を共にすることになったのだから、これ以上の親しい山友達はないわけだ。

名刺には、新聞記者には似つかわしくない、彼の流れるような美しい字で、

『龍安寺の帰りに、通りがかったのでお寄りしました。都合により宿はお知らせいたしません。』

と、書き添えてあった。

「見るからに、新婚らしい一組でした。」

お隣りの奥さんの説明を聞くまでなかった。私は、ペンの字を、もう一度よみかえた。そして、「都合により……」の文句につき当ると思わず、微笑がこみあげて来た。これには、二人だけが知っている、ある思い出があったからである。

\*  
\*

地球上の最高点、エヴェレストが、英国隊によって登頂されたことは、いろいろの意味で、世界の巨人たちに、大きな衝撃を与えた。久しく待望されていた栄光が、人類の上に輝いたことは、まことに喜ばしいことであった。が、それと同時に、世界の登山家たちの胸の中から、最も大きな夢が消し去られてしまったのである。まさにエヴェレストの陥落は、私たちにとって「嬉しい失望」であったわけだ。

ところが、この世紀の出来事の結果だけしか見ることが出来なかった世界の新聞人たちは、平素の癪にさわるほど登山に対する冷淡な態度も、どこへやら、全くてんやわんやの大騒ぎをおっはじめたものだ。あげくのはては、リレーでいえばアンカーの役割を演じたヒラリーとテンシンの二人を、世紀の英雄に祭り上げてしまう始末だった。

この騒ぎは、いわば一種の「はしか(麻疹)」のようなもので、何も新聞人だけが責められるべきものでなく、このニュースに関心をもった人たちは、誰でもみんな、それにかかっていたのである。ヒラリーに『サー(郷)』の称号を送ることを決めた英国の政府筋も、どうやら、その例外ではなかったようだ。

もっとも、私たちとて、他人のことばかりいえた義理ではない。いまから思えば、あの当時の私たちにも、その明白な症候があらわれていたと、断じないわけにはいかない。そして、その話というのはこうだ。

\*\*\*

酷暑のカルカタで、ネパールへ向けて印度国内を通過させる遠征隊の荷物の、無税通関の手続きのために、税関の役人たちと煩わしい交渉にあけられていた、その年の九月下旬のある日の朝のことだった。

ホテルのベットの上で、ボーイがもって来た印度の有力な英字新聞の「ステーツマン」紙に目を通していた私は、一つの記事に思わず目を止めた。

それは、サー・エドモンドとレーディ・ヒラリーの夫妻がロンドンへの道すがら、カルカタへ立ち寄ったことを報じたもので、ダムダム飛行場での二人のにこやかな写真まで大きく組み入れたものだった。この度の彼等の旅は、まぎれもない密月旅行をかねた英国への講演旅行だったのだが、インタービューをした記者が、このような個人的なことには一言もふれていないのには感心させられた。

私は朝食のあとで、この記事を隊の報導員のT君にみせた。丁度、ニューデリーから応援に来ていた同じ社のS特派員も席にいたので、ことは収まりがつかなくなった。ヒラリーの会見記をとろうというのである。新婚旅行中の御兩人に、何もそんな野暮なことをしなくても、と考えないでもなかったが、別に五分間かそこら、会って祝福を送る位、かまわないだろう、との話になっ

た。

それから、不案内なカルカッタの街の中を、私たち三人の探偵小説めいたヒラリー追跡的一幕があったわけである。その行動を、一つ一つ書いてみたところで詮ないことだ。新聞社、英国領事館、ヒマラン・クラブ支部など、考えられるあらゆる筋を、片っ端から当ててみたが、知らない、分らない、といったのよい拒絶をうけただけだった。

領事館のKさんが、あつめてくれた情報によると、ヒラリー夫妻は人目につきやすいホテルをわざわざ避けて、ある友人の邸宅のおくふかくまわれていた。またカルカッタ中の彼の知人の間では、その秘密をまもる約束が出来ていて、二人の新婚の夢をおびやかすような不心得者(?)を近づけない作戦だということが判明した。いかにも個人の幸福を、何よりも大切にしているイギリス人らしい話ではあった。が、ここに至れば、私たちもやや意地になっていた。

そのとき、あまり私たちの熱心さをみかねたのか、あるいは同じヒマランの縁につらなる者だからと、心をやわらげてくれたのか、飛行場で夫妻が発発するときに、一寸だけ挨拶を交す位のことなら出来ないこともないだろう、と示唆を与えてくれた英人があった。私たちは、インド航空の営業所で、飛行機の出る時間を確かめ、ついに世紀の英雄をこの目でみる事が出来ると、期待に胸をはずませた。このあたり、私たちも、かの「エヴェレスト風邪」に感染していたことは、いまにして考えれば間違いのない事実だったようだ。

ヒラリー夫妻の乗る飛行機は、その日の午後一時にダムダム飛行場からニュー・デリーへ向って出発すると知らされていた。カルカッタの市内から飛行場までは、タクシーで三十分余りかかす。十一時半ごろホテルを出た三人は、先ず腹ごしらえをしよう、というので近くの行きつけの支那料理店で昼食をとった。後で思えば、これが千慮の手痛い一失だった。

私たちが十二時半すぎに、飛行場の待合室に飛び込んだときは、何たることか、たったいまヒラリー夫妻をのせた飛行機が出たところだ、とインド航空の係員の話である。

「あの爆音が、それです。」  
と係員はつけ加えたが、私たちは聞いてはいなかった。飛行機は予約された乗客が揃いさえすれば、予定の時間よりも三十分位は早く出ることもあるのは、何もインド航空に限ったことはいない。そのような可能性を、私たちはすっかり忘れていたのだった。昼食さえとらずに、まっすぐ来ていたら間に合ったのに、と口惜しがられた。  
がっかりした私たちは、タクシーがカルカッタの市街の中にあるホテルへ戻りつくまで、一言もしゃべらなかつた。

\*  
\*  
\*

私がT君の名刺の短い文句から、つい誘われたカルカッタでの回想の一駒は、ざっとこのよう

なことだった。そして、また僅か三十分足らずの時間のずれのため、ヒラリー夫妻を逸したのと同じケースで、新婚のT夫妻に会いそびれたのも、如何にも皮肉だった。私が思わずひとりで笑ってしまったのも無理はなかった。

「宿は知らせない」といっても狭い京都のことだ。ものの二十分もかければ、T君の泊りそうな所をつき止める位、わけのない話である。不案内な異国の街とは違ふのだから。しかし、私はただ彼の名刺を、机の引出しに入れただけであつた。

翌日、大学の私の研究室の方へT君から電話がかかってきた。

「昨日はどうも失礼しました。」

「うむ、折角御両人の姿を見ることが出来たのに、残念なことをしたよ。」

「どうも済みません。」

「宿はどこだったの?。」

「S屋ですよ、ふや町の……。」

「まあ、大体そんな見当だろうと分っていたがね。ヒラリーのときのこともあるしね、まあ、そつとして置いたわけだよ。」

「はっはっは……。」

T君の、さも愉快そうな笑声が途中で切れた。私は彼が傍らの新夫人に、この私とのやりとり

を、説明してやっている俵せそうな光景が容易に想像された。

しばらくしてから、家内からもよろしく、と伝えるT君の少ばかり面はゆいような声が受話器から流れて来た。

T夫妻は、その日の『はと』で、東京へ戻っていった。折悪しく、手のはなせない実験を始めていた私は、彼等を駅まで見送ることも出来なかった。

## 山と夢と

——“あながき”にかえて——

このごろ、ときおり私は、一体いつごろから山というものに「ヘアウスト博士のように」私の魂を売り渡してしまふようになったのだらうか、とつくづく考えてみることもある。

私の最も古い記憶に残っている山は、氷河をもった堂々たるものだ。レニア山——タコマ富士とも呼ばれているこの山は、北米の西部海岸、ワシントン州にある四千米をこえる独立峰で、形こそ日本の富士に似た美しい山だが、数本のかなり大きな氷河をもっており、私が両親とともに住んでいたタコマ市の街の中から、朝な夕なに眺めた容姿は、今もって強く私の脳裏に焼きつけられている。

流石にアメリカの山らしく、かなり山の上の方まで、舗装した自動車道路がつけられていて、私も父の運転する車にのって、氷河の舌端まで行った。氷の崖があって、その下から流れ出てくる水に西瓜や、ココロラを冷して、楽しい一日を過ごしたのだった。

しかし、このレニアの氷河のみえる町での、私たちの倅せは、永くは続かなかった。医者であった私の父が、その後まもなく亡くなり、私は母につれられて故国へ戻って来た。私が十歳のと

きのことであった。

父親のない家庭の淋しさというものは、幼い子供たちには、特に強い影響をもつもののように思う。私は、伊勢平野の真中にあった父母の生れ故郷の村から、近くのT市の中学へ通うようになって眺めるようになっていた。中でも、T市の真西にある経ガ峰は、八百そこそこの高さではあったが、その一段と高くそびえた頂上が、私を招いているように思われた。まだ中学へ入ったばかりの年の夏休みのある日、私は仲のよい級友二人を強引に勧誘して、家から自転車にのって出かけた。山麓まで八里余り、麓の村の農家に車をあずけて、地図ももたずに登って行った。幸い天候もよく、このいささか乱暴なリーダーに率いられた隊も、午後一時頃、経文を埋めたと伝えられる塚のある頂上に立った。

(157) 山と夢と  
頂上から西の方は、同じような山が続いているだけだったが、東の方には、あい色の水をたたえた伊勢湾がよこたわり、それにつづく平野の中に、点々と村や町が、まるで玩具の家並みのようみえた。私は、どこか別世界の人間になったような気がした。わけもなく楽しかった。そして、この楽しい気持が、いわば私に、山に魂を売り渡してしまふような、大それた決心をする動機になったに違いないと、今になって思うのである。母一人、子一人の身の上でありながら、そして母親の切ない願いさえも、しりぞけて、この日から私の山から山への放浪が始まったのだ。

山には限らない夢があった。それから、私は御在所岳や鎌方岳などの鈴鹿の山々を次々と登っていった。そして、それが尽きかけた頃、高等学校へ入った。そこで、近代登山の洗礼をうけ、穂高の岩場へと連れていかれた。そのあとは、まるで加速度的な傾倒ぶりだった。夢はぐんぐんと、大きくふくらんで行った。氷雪の山へ。そして世界の屋根ヒマラヤへ――。

私は、かねてから、夢のおもむくままに訪れた山々のことなどを、綴ってまとめてみたいという希望を抱いていたが、いまここに「山溪」の川崎さんの好意によって、この小冊子が世に出ることになった。これは、いわば私の若い日の夢物語である。この中には、読む人の胸をわき立たせるような勇壮な話は、何一つ見当らない。あるものといえば、題とおよそ似つかわしくない幼い感傷にみちた文字ばかりだ。それだけに、文中に登場して頂いた方々には、全く申し訳ないと思っている。私の山と夢とは、いうまでもなく数知れぬ友人たちに支えられて育ってきた。この目に見えない人々の厚意に対しても、私はこの機会に、心からなる謝意を捧げたいと思うのである。このような多くのよき山仲間にも恵まれた私は、本当に倅せ者であった。

いま私は「思い出よりも憧憬を」選ぶといった、あるフランスの登山家の言葉を思いうかべる。文字になった山々は、もはや私の夢の残骸であるかも知れない。そして、いま静かに眼をとじると、はるか地平線の彼方に、白い山脈が見えるような気がする。どこまでも、どこまでも続いている氷雪の山なみである……。

筆者紹介

大正十二年三重県に生る。八高をへて京大医学部卒。現在同大学医学部微生物学教室にて細菌学を専攻中。高校時代より穂高に親しみ、戦時中から戦後にかけて、屏風岩正面岩壁の開拓に情熱を燃した。京大在学中に山岳雑誌「岳人」を創刊、その編集を担当して現在に至る。冬の知床連征(隊長)から一九五三年京大ヒマラヤ遠征隊に参加して、アンナプルナ第II、第IV峰に登攀。著書に「登山技術」「登山とキャンピング」「岩登り」技術と指導」がある。



昭和三十年八月十日 発行

定価 一〇〇円

著者	伊藤洋平
発行者	川崎吉藏
印刷者	柳川太郎
発行所	株式会社山と溪谷社

東京都中央区銀座八・出雲ビルディング  
振替 東京六〇二四九番  
電話(銀座)六四七三番・四七二番

凸版印刷株式会社印刷

—— 山岳新書 ——

猪谷六合雄 雪に生きる 《上》 100 円

猪谷六合雄 雪に生きる 《中》 100 円

猪谷六合雄 雪に生きる 《下》 100 円

